

2023 年 12 月 25 日

中央大学文学部

英米文学研究

第 41 号

目次

学部卒業論文

Lucy Maud Montgomery, *Emily's Quest* においてエミリーが求めているもの 加藤 慧 (3)

『余った女たち』から読み解くヴィクトリア朝の女性の人生 藤井 朱音 (17)

「主体」としてのオフィーリアの物語 安田 萌々花 (33)

子ども向け絵本の多面的分析 高久 将哉 (49)

English participial phrases and the judgments of learners with L1 Japanese Riko SATO (67)

中央大学英米文学会会則
英語文学文化専攻専任教員/編集後記

中央大学文学部英米文学会

学部卒業論文

序論

本論文では、ルーシー・モード・モンゴメリ (Lucy Maud Montgomery) 著の、『エミリーの求めるもの』(*Emily's Quest*, 1927) を取り上げる。本書は、女性のあり方や結婚に対し保守的な考えを持つ人が多く住む、カナダのプリンスエドワード島ニュームーン (New Moon) において、エミリー・バード・スター (Emily Byrd Starr) という女性が小説家になることを目指し奮闘する物語である。本論では、エミリーが求めるものが小説家として新たな社会をつくり出すであることについて論じる。

幼い頃に両親を失ったエミリーは、母方の親戚であるマレー家に引き取られ、エリザベス・マレー (Elizabeth Murray) やジミー・マレー (Jimmy Murray)、ローラ伯母さん (Laura Murray) たちと共にニュームーンで暮らしていた。本書は、そのエミリーが高校を卒業し、シュールズベリー (Shrewsbury) から、再びニュームーンへと帰ってきたところから始まる。エミリーには、イルサ・バーンリ (Ilse Bunrley) やテディ・ケント (Teddy Kent)、ペリー・ミラー (Perry Miller) といった古くからの友人がいるが、エミリーがテディを恋愛の対象として意識するようになったことで、友人との関係の中に葛藤が生まれるようになる。また、彼女は小説家として成功を掴むために奮闘するが、作品が出版社に受け入れられないという現実と、それでも自身の作品に対する妥協はしたくないという思いから葛藤にも悩まされていた。人間関係と追い求める夢の中であらゆる葛藤を感じているエミリーだが、エミリーはこれらに関して一切の妥協もすることはなかった。人間関係では、迎合的な結婚や恋愛をするのではなく、自分の思いや成し遂げたいことを優先した。また物語の創作では、自身の感性や経験をもとに、書きたいものを探求していくというスタイルを貫いた。本作は、エミリーが当時の常識や規範にとらわれることなく、追い求めるものを手に入れるために奮闘する物語である。

本論では、まず、エミリーと虹との関係性に注目し、彼女の追うものがどのような対象なのかを論じる。次に、エミリーが女性として家庭に求めるものについて、本作と、サラ・オーン・ジュウェット (Sarah Orne Jewett) 著の「白鷺」(“A White Heron,” 1886) での自然描写の比較をしつつ論じる。同時に、『赤毛のアン』(*Anne of Green Gables*, 1908) を取り上げ、本作との家庭のあり方の比較を行う中で論じる。最後に、エミリーと薔

薇との関係性を考えつつ、彼女の小説がどのような影響を与えたのかを考察し、彼女が小説家として成し遂げたかったことが何なのかを論じる。

第1章 虹を追うエミリー

エミリーは、虹を追う者である。本作における虹とは、単なる彼女の夢ではない。またこれを追うことも、単に叶わぬ夢を追っているという意味ではない。エミリーがこれらのものを追うことには、彼女が自然との関係性を持つことや、非現実的な夢を追求することの正しさが表されている。ここではまず、エミリーが虹を追うときに追い求めるものが何なのかを考察する。さらに、エミリーが虹を追う中で、その先にある自分の追い求めるものを認識したきっかけが小説を書くことであったことを論じる。そして、本作での虹を追うことの意味合いの特殊性によって示された、エミリーの求める小説家のあり方を明らかにする。

以下では、エミリーが虹を追い始めた日についての描写を取り上げてみよう。

Once, when Emily had been very small, . . . she had started out to seek the rainbow's end. Over long wet fields and hills she ran, hopeful, expectant. But as she ran the wonderful arch was faded-was dim-was gone. Emily was alone in an alien valley, not too sure in which direction lay home. For a moment her lips quivered, her eyes filled. Then she lifted her face and smiled gallantly at the empty sky.

“There will be other rainbows,” she said.

Emily was a chaser of rainbows. (5)

まず、エミリーが虹の終わるところを探しにゆき、見つけ出すことができなかったということについて考える。先に、本作での虹の意味が単なるエミリーの夢を表すものではないと述べたが、ここではまず虹を夢として彼女の行動を考察する。

虹を夢と考えると、虹の終わりを探すことにはいくつかの意味がある。一つ目は、夢が実現したその先にあるものを探すという意味である。つまり、エミリーが単に小説家になることを最終目標にしているのではなく、その夢が実現した後に起こりうるものを手に入れようとしていることを表している。

二つ目は、当時幼かった彼女にとって、夢の先に求めるものが不明瞭であったことを意味している。このことは、虹の状態を見ることで明らかになる。虹は徐々にかす

み、消えてしまったとあるが、これは彼女の追うものが非現実的な夢であることを意味すると同時に、小説家として成功したその先に何を求めるのかが不明瞭であったことを表しているのである。

そして三つ目は、追うものが限りなく彼女に近い場所に存在するという意味である。虹という現象について考えると、自然現象である虹は短時間で消えてしまうものの、人間の近くで頻繁に起こりうるものである。このことは、夢やその先にあるものを得るための鍵が身近にあるのだということを表している。つまりこれは、自然や人々の繋がりという身近なものを題材とした物語を創作することで、小説家として成功する彼女のあり方を表しているのである。また、三つ目の意味にはさらに広がりがある。追う虹が自然現象であり、彼女が後にそれを題材とした小説を書くことで成功を収めることは、身近にある自然が彼女を成功に導く目印であったこと表しているのである。つまり、虹を追うエミリーは、一見、遠く手に入れがたい夢を追っているように見える。しかし実際は、彼女は身近に在る成功の鍵となる対象を追い続け、よく観察することで、小説家という夢のさらに向こう側で成し遂げたいことを探しているのだといえる。

次に、エミリーが求める虹の向こう側にあるものが何なのか、また小説を書くという行為を通じてこれを明確に認識したことを論じる。

これを論じるにあたり、まず、彼女にとっての喜びが、自身の内面から生まれ出るものを材料とし創作すること、そして、その物語によって読者に影響を与えることであることを明らかにする。

彼女の経験および内面から生まれ出た作品として、伯母さんたちのために創作した“The Moral of the Rose” (147)について描かれている場面を取り上げてみよう。

“That Nicholas Applegath is too much like old Douglas Courcy, of Shrewsbury,” she said.

“I told you not to put any people we knew in it.”

“Why, I never saw Douglas Courcy.”

“It’s him to the life. Even Jimmy noticed it. You must cut him out, Emily.” (147)

ここでは、エミリーが伯母さんの知人に会ったことがないのにも関わらず、その知人と性格や特徴のよく似た人物を繊細に描き出している。このことから、彼女は自身の暮らす土地の人々との実際の関わりから、その地域の人の特徴をとらえ、それを描き込んだ作品を創作しているのである。

また、彼女の物語を聞いた伯母さんたちの反応をもう少し取り上げてみよう。“It kind of took my thoughts away from myself. The folks seemed sort of real to me. I suppose that is why I feel as if I want to know what happens to them” (143)。これは、エミリーの作品がニュームーンに住む人々の特徴をリアルに描き出したものであったため、その地域の人たちが共感を覚えるものであったことを意味している。つまり、彼女のローカルカラーの強い作品は、その地に暮らす人々にこのような共感を通じて影響を与えるものであったといえる。

さらに、このような作品創作のあり方が彼女にとっての喜びであることが示された場面を取り上げたい。“She was very much absorbed in it by this time. The composition of A Seller of Dreams had been, but it was very fascinating. She forgot all vexing and haunting things while she was writing it” (147)。エミリーが小説を書くことは、自身の周りにあるものやこれまでの経験を作品という形にしていくことである。そして、彼女にとってはそれが純粋に楽しく、夢中になれることなのである。つまり彼女は、これまでに観察を続けてきたニュームーンの自然や人々のありさまを材料とした作品創作を楽しんでいるのである。

これらのことから、エミリーはニュームーンでの自身の経験や地域の人々の特徴、そして自然観察に基づいた、地方色の強い作品を書くことに夢中になっている。また、作品を身近な人に読んでもらい、理解してもらうことを通じ、彼女の作品が自然と読み手を惹き付ける作品になっているのだと気づき、このような小説創作の活動にさらに喜びを感じるようになったのだ。そして、喜びの先に求めるものは、彼女の作品を通じ、ニュームーンのありさまを地域の人々に提示することで、当時の人々の考え方を変えていくことであるといえる。

つまり彼女は、自然を追い、物語を創作することで、自身にとっての本当の喜びを知り、それを他者に見せることで喜びの先に求めるものを明らかにできたのである。このように、エミリーは自然の中から生じる虹を追いつけることで、地域に根ざした自身の小説のスタイルや、物語を通じて成し遂げたいことを確立できたのである。

第2章 ニュームーンの自然とエミリーの求める家庭

ここでは、エミリーが小説家である以前に、ひとりの女性として求めるものについて論じる。これを論じるにあたり、まず、似通った気候が舞台であり、作中で示されている男女のあり方が共通しているといえるサラ・オーン・ジュエット (Sarah Orne

Jewett) の「白鷺」(“A White Heron,” 1886) を取り上げ、本作との比較を行う。そして、両者の自然描写の比較から、自然と主人公との繋がりが意味するものを明らかにする。また、白鷺のカップルと、本作のエミリーとテディの関係性との比較を行い、これらが意味するものについて論じる。

次に、本作の著者であるモンゴメリの作品であり、主人公の少女の境遇が似ているといえる、『赤毛のアン』(Anne of Green Gables, 1908) の家庭と本作の家庭の比較をしつつ、エミリーが求める家庭について考察を行う。

はじめに、「白鷺」について簡単な作品の紹介を行う。都会に住んでいたシルビア(Sylvia) という九歳の少女は、祖母の暮らす田舎で暮らすことになる。ある日、シルビアが牛の世話をしながら森の中を歩いていると、彼女の前に白鷺を追う猟師の若い男性が現れる。彼はシルビアが白鷺を見つけるのに協力をしてくれるのなら、彼女に十ドルをあげるつもりだと話す。シルビアには、若者に対する興味があったが、男性に白鷺の居場所を教えられずにいた。若者に対する気持ちと自然に対する気持ちに挟まれた彼女は、松の木の頂上に登り、白鷺のカップルを観察することで気持ちを固める。シルビアは結局、猟師の男性に対する想いやお金よりも、自然と白鷺を守ることに徹したのであった。

次に、「白鷺」と本作における自然描写を比較し、それぞれの中で示されている女性としての想いと、主人公と自然との重要な繋がりについて明らかにする。

まず、「白鷺」における自然描写については、シルビアが松の木を登っていく場面を取り上げる。“The tree seemed to lengthen itself out as she went up, and to reach farther and farther upward” (17) では、松の木の描写の中に二つの意味が含まれている。

一つ目は、現在の暮らしだけではなく、自分の周りに存在する広い世界や選択肢を見たいというシルビアの想いである。つまりここでは、シルビアの见ているものを通して、当時ではほとんどが家庭の内側に限られていた女性の生活や立場から抜けだし、外の社会に出てゆきたいという女性の想いが示されているのである。

二つ目は、シルビアと自然の繋がりである。高い所へ登ろうとしているシルビアに対し、上へと伸びていく松の木の描写は、自然が少女にとっての支えとなる特別な存在であったことを表しているのである。これは、シルビアに世界の広さを教えてくれたのは自然であることを示している。つまり、彼女は自然の有り様を観察することを通じ、それを自身の境遇と重ね合わせることで、自身の周りにある選択肢を見ることができたのである。

本作における自然描写については、次の描写を取り上げよう。“Scents of pine and rose

were in it; boom of bees, threnody of wind, murmurs of the blue Atlantic gulf; and always the soft sighing of the firs in Lofty John Sullivan's "bush" to the north of it. Emily loved every flower and shadow and sound in it" (4)。ここでは、茂みがのっぼであることと、美しい部分のみ切り取ったような描写となっていることに注目したい。このことは、エミリーがニュームーンの自然はよく知っている一方で、高い茂みの向こう側にあるものにはあまり触れておらず、色鮮やかなイメージのみを持っていることを表している。つまり、のっぼの茂みは外の社会と家庭の内側との境界線として描かれており、これは当時あまり足を踏み入れることがなかった外の社会に対する、女性の憧れや期待を意味している。また、この茂みがエミリーの愛するテディが現れる特別な場所として描かれていることは、自然が彼女の欲しいものを与えてくれる存在であることを表している。つまり、エミリーは自然に触発されたのであり、彼女を突き動かした存在として、自然はなくてはならない存在であったのである。

このことから、「白鷺」と本作の自然には、共通して自然描写の中で外の社会に出たいという女性の想いが示されている。また、松の木が白鷺のあり方をシルビアに見せてくれたことや、のっぼの茂みがエミリーの欲しいものを与えてくれたことは、自然が主人公を突き動かす存在となっていたことを表している。次に、「白鷺」での白鷺のカップルと、本作でのエミリーとテディの夢の中のあり方とを比較し、それぞれの中で示された男女の新しいあり方について考察をする。

まず、白鷺のカップルのあり方に関しては、以下のように描かれている。

"And wait I wait! do not move a foot or a finger, little girl, do not send an arrow of light and consciousness from your two eager eyes, for the heron has perched on a pine bough not far beyond yours, and cries back to his mate on the nest and plumes his feathers for the new day!" (19)

これは、雄の白鷺が巣の中にいる雌の白鷺を外の世界へと連れだそうとしている瞬間が、シルビアの目線から描かれている場面である。ここで、白鷺のカップルの行動を熱心に、期待の目で松の木の上から見つめるシルビアの姿について考えたい。彼女の視線には、男性は外、女性は中という当時の家庭ではない、新たな家庭を求める女性の想いが示されている。つまり、白鷺のカップルがともに外へと羽ばたく様子は、男女がともに外の社会に出てゆくという家庭のあり方を表している。また、この光景を町全体が見渡せる松の木の高い場所から見ている少女の姿には、新たな家庭の中で、

広い世界と選択肢を見たい、得たいという女性の想いが示されているのである。

次に、エミリーとテディが同じ夢を見ていたと分かる場面を取り上げる。

エミリーは、夢について以下のように述べている。

“Teddy. Come.”

It seemed to her that she caught his hand and pulled him away from the window. Then she was drifting back from him—back—back and he was following—running after her—heedless of the people he ran into following—following— (88–89)

テディも同様に、夢について以下のように話している。

Suddenly I felt a touch on my arm—I turned and saw you. I swear it. You said, “Teddy—come.” I was so amazed I could not think or speak. I could only follow you. You were running—no, not running. I don’t know how you went—I only knew that you were retreating. (93)

夢の中の彼らの行動では、エミリーがテディをある方向へと導き、それに従いテディがついて行っている。このことは、夢が単に彼らの心が通じ合っているというロマンチックな状況を示すばかりでなく、女性が望む男女のあり方を示していることを表している。つまり、どちらか一方が常にリードする立場に立つのではなく、互いに正しい方向に導き導かれる関係にあることを望む女性の想いが描かれている。

このことから、「白鷺」と本作では、家庭において暗黙のうちに定められている男女の役割に対し、女性が望むあり方が、主人公の女性のあり方を通じて示されているのである。そして、女性が望むあり方とは、家庭の外側と内側の間に壁をつくらず、互いに外の社会へ導き合ったり、必要なときに手を差し伸べたりする関係性なのである。

次に、『赤毛のアン』と『エミリーの求めるもの』での家庭のあり方の比較を通じ、エミリーの求める家庭がどのようなものなのかを明らかにしよう。

はじめに、『赤毛のアン』の簡単な物語の紹介を行う。11歳の少女アン・シャーリー (Anne Shirley) は、幼い頃に両親を失い、孤児として養護施設で育てられた。ある時、アンは、農場の手伝いのために男の子を必要としているマシュー・カスバート (Matthew Cuthbert) と妹のマリラ (Marilla) の元へ誤って送られ、グリーンゲイブルズ (Green Gables) にやって来る。カスバート兄妹ははじめ、女の子がやって来たこと

に驚く。マリラはアンを施設に返すことも考えていたが、アンに対する同情心が芽生え、家に迎え入れることに決める。アンは、彼女の容姿について厳しい発言をしたレイチェル・リンド夫人 (Mrs. Rachel Lynde) や、学校で彼女をからかったギルバート・ブライス (Gilbert Blythe) に対して癈癢を起こしたり、親友になったダイアナ・バリー (Diana Barry) に誤ってお酒を飲ませてしまったりとあらゆる失敗を経験する。

しかし、これまでに培った知恵と勇気、そして想像力によって困難を乗り越えていく。最終的にアンは教師になることを決意し、はじめはアンのことを受け入れなかった友人や周りの大人たちも、賢く勇敢なアンを尊敬するようになっていく。

ここからは、マシューのあり方の逸脱性と、アンの進めた新しい家庭のあり方に注目し、考察を行う。

まず、マシューの逸脱性について、彼の引っ込み思案な性格について考えてみよう。彼のあり方については、冒頭では次のように描かれている。“Matthew so rarely went from home that it must be something pressing and unusual which was taking him; he was the shyest man alive and hated to have to go among strangers or to any place where he might have to talk”

(2)。このようなマシューのあり方が、女性的であるということを三つの観点から論じる。

一つ目は、彼が家庭の中に留まることを望んだことについてである。ここでは、当時の一般的な家庭での男性のあり方が、外の社会へ働きに出かけ、家庭の内側のことは女性に任せるというものであったことを考えたい。すると、社交的な場所に出て行かず、家庭の内側にいることを望んだマシューは女性的であるといえるのである。

二つ目は、彼がアンを家庭の中に受け入れようと言ったことについてである。アンがグリーンゲイブルズにやって来た際、最初に彼女を受け入れると言ったのは、マシューであった。このことは、彼には子供を家庭の中に受け入れたいという、母親の持つような想いがあることを表している。

そして三つ目は、家庭の中で常にアンの望みを第一に優先しているあり方についてである。これを論じるにあたり、マシューがアンの将来についてマリラと話し合っている際の、彼の発言に注目したい。“We must see what we can do for her some of these days, Marilla. I guess she’ll need something more than Avonlea School by and by” (205)。この発言には、彼がアン、つまり子供の生き方を決めるのではなく、アンの望みを叶えるための支えとなるあり方をしていることが示されている。当時の家庭は、ダイアナの家庭に代表される家父長的なあり方が一般的であったことを考えると、マシューのあり方は逸脱しているのである。

また、アンが逸脱していると考えられた家庭環境の中で、実力で教師となったことが表すことについて論じる。アンが教師になり、自分の力で生きてゆく力を得たことは、マリラやマシューのあり方を肯定したことになるのである。つまり、女性が社会に出て生計を立てるあり方を彼女が手に入れたことは、結婚をせずに自立した暮らしをするマリラや、女性的なあり方であるマシューの暮らしを肯定したということなのである。

これらのことから、アンの夢を支援するマシューと、彼のあり方を受け入れるマリラは、アンを教師という夢に押し出した存在といえるのである。また、アンがカスバート兄妹の家庭の中で育ち、教師という夢を実現したことによって、彼女らの家庭のあり方を肯定したのである。つまり、アンの家庭は互いのあり方を受け入れ、支え合う関係性にあったのであり、この関係性が良好な家庭をつくっていったのである。

次に、『エミリーの求めるもの』における家庭のあり方について考察を行う。ここでは、エミリーとディーンが破局した際の二人の関係性について考える。エミリーに別れを告げられた際に、ディーンは、“You remember that book of yours? You asked me to tell you the truth about what I thought of it? I didn't. I lied. It is a good piece of work—very good. . . . It has charm and your characters do live. Natural, human, delightful” (97) と言っている。このことは、婚約当初のディーンには、エミリーが夢中になっている小説の創作を否定することで、彼女を自分の妻として束縛しようとしていた意図があったことを表している。しかし、別れを告げられた彼は、エミリーの能力を認め、作家としての彼女のあり方を受け入れたことで、彼女を小説家として押し出しているのである。

また、ディーンから本当の小説の評価を聞いた際のエミリーの心情にも注目してみよう。“Emily pulled herself together. Something had happened—she was really free—free from remorse, shame, regret. Her own woman once more. The balance hung level between them” (97)。このことは、ディーンがエミリーのあり方を受け入れたことで、婚約当初では均衡が崩れていた二人の関係性に、初めて均衡が取れたことを表している。そして、エミリーがのちに小説家として成功を収めることは、彼女の小説家としてのあり方を受け入れ、夢に向かって彼女の背中を押し出したディーンのあり方、および破局時の二人の関係性を肯定したことになるのである。このことから、ディーンがエミリーの小説家としてのあり方を受け入れた際に、初めて二人の関係性は平等になったのである。また、これを受けたエミリーが小説家になることで、彼のあり方を肯定したことは、二人がお互いのあり方を受け入れ合うことで良好な関係性を築いていったことを表しているのである。

これまで、「白鷺」と『赤毛のアン』を取り上げ、それぞれと本作の比較を行ってきた。以上のことから、自然はエミリー彼女の求めるもののヒントを教えてくれる存在であったことから、重要な存在であったといえるのである。また、エミリーが女性として求めることは、テディとの夢やディーンとの関係性から、家庭の内側と外側に境界線をつくらず、お互いのあり方を受け入れ、肯定し合うことなのである。

第3章 エミリーによって開かれた道と薔薇の望み

ここではまず、エミリーと薔薇の関係性がどのようなものなのかを論じる。次に、エミリーが追うものとしての薔薇と虹の繋がりについて考察をする。さらに、失望させられない家がどのような意味を持っているのかについての考察を行う。そして最後に、“the To-morrow Road” (53-54) と薔薇の繋がりを考えつつ、エミリーが本当に求めているものが何なのかを考察する。まず、エミリーと薔薇の繋がりについて考察を行う。以下では、十四歳の自分から二十四歳の自分に宛てた手紙と、その中に入っていた薔薇の花びらが登場する場面を取り上げてみよう。“She had forgotten that it was there; and now it fell in her hand, faded, unbeautiful, like the rose-hopes of long ago, yet with some faint bitter-sweetness still about it” (160-61)。この場面では、過去の薔薇の望みと、現在の枯れて崩れてしまった薔薇の花びらとの対比について考えてみよう。この対比では、エミリーにとっての過去の薔薇は、今となっては枯れて崩れてしまうものであることが言われている。つまり、薔薇は彼女の求めていたものを表しているのである。それでは、エミリーの求めていたものとは具体的にどのようなものなのか。以下で手紙の内容について見る中で考察する。

Have you written your great book? . . . Are you a staid old married woman with several children, living in the Disappointed House with One-You-Know-Of? . . . Oh, dear Twenty-four, I put into this letter for you a kiss—and a handful of moonshine—and the soul of a rose and some of the green sweetness of the old hill field—and a whiff of wild violets. I hope you are happy and famous and lovely; and I hope you haven't quite forgotten. (161)

この手紙には、当時まだ十代であったエミリーが思い描く理想の家庭やあり方が、つまり彼女が求めていたものが記されている。つまり、彼女の求めるものとは、小説家としての成功と家庭の両方を得ることなのである。一方で、ここで彼女の住む家が〈失

望の家〉であることは、小説家としての活躍と、家庭での幸せの両方を得ようとするあり方には、常に失望という可能性が付いてくるのだということを表している。このことから、薔薇はエミリーの希望である一方で、失望とも強い結びつきがあるものである。

ここからは、薔薇の希望と失望の二つの結びつきについて、それぞれ該当する場面を取り上げて考察を行う。薔薇の中に希望が表されている箇所は、第二章で取り上げた〈のっぽのジョン〉の茂みの描写の場面である。茂みの中の描写として、“Scents of pine and rose were in it” (4) というものがあつた。そして、先では、この茂みが女性の憧れや期待を意味していると述べた。つまり、女性の希望を表す茂みの中に薔薇の香りがあることは、薔薇もまた希望の対象として存在していることを表しているのである。また、薔薇には失望が付き物であることを表す箇所としては、ディーンとエミリーの失望の家での場面を取り上げてみよう。

失望の家で、ディーンは“*There are roses in that far comer—old-fashioned roses like sweet old songs set to flowering*” (73) と言っている。これは、失望の家の中に薔薇が咲いているということである。ディーンがエミリーを失望させた家の敷地に薔薇があることは、つまり、薔薇がエミリーの失望を呼ぶ存在でもあるということである。しかし同時に、失望の家を失望で終わらせてはいけないという、彼女の希望が薔薇の中に表されているともいえるのである。

次に、薔薇と虹の関係性について注目してみよう。第1章で論じた、エミリーが追っていた虹と、ここでの薔薇には共通点がある。一つ目は、夢の先に自分が何を求めるのかを模索しているということである。先では、女性の期待や憧れを表す茂みの中に、薔薇の香りがあることについて注目した。このことは、のっぽの茂みの中に隠れている薔薇を見ようとしていることを表している。つまり、自分の夢の先に何があるのかを探していることになる。これは、エミリーの追うものが、彼女の身近に存在していることを表している。このことから、薔薇の中には虹に通じる自然の代表という意味合いがあることが分かる。

さらに、ここから、薔薇と〈明日の道〉の繋がりについての考察を行う。この考察を行うにあたり、エミリーが名付けた〈明日の道〉の先にある、失望させられない家の存在に注目する。まず、エミリーが〈明日の道〉の前に立っている場面を取り上げてみよう。“*She was standing where To-morrow Road opened out on the Blair Water valley. Behind her she heard Teddy's eager footsteps coming to her. Before her on the dark hill, against the sunset, was the little beloved grey house that was to be disappointed no longer*” (228)。ここで、ま

ず注目したいのは、「もはや再び失望させられることのない家」についてである。

この場面の前で、ディーンは“I want you to take this, Star, as my wedding gift. That house must not be disappointed again” (228) と言っていることから、「もはや再び失望させられることのない家」とは、かつての失望の家を表していることが分かる。では、失望させられることのない家とはどのような家なのか。ここでは、後ろからエミリーを追いかけてくる、テディの熱心な足音について考えたい。これまでのテディは、自分からエミリーの元へ行くよりも、茂みから口笛を吹くことでエミリーを呼んでいた。テディは、エミリーを追いかけるのではなく、彼女の方から自分の元へやって来るのを待っていたのである。しかしここでは、テディの方から一生懸命にエミリーを追う姿が示されているのである。エミリーの前には、ディーンがくれた失望させられない家があり、後ろに以前から変わったテディがいる。このことは、エミリーと、過去に失望をした男性のあり方の変化を表しているのだ。つまり、失望させられない家とは、家庭の中における男性と女性の関係性に失望をさせられないという意味だといえるのである。

最後に、これらのことを踏まえ、〈明日の道〉が何を意味するのか、また、そこから明らかになる、エミリーの求めていたものについて論じる。まず、〈明日の道〉について、先で取り上げた失望させられない家に再び注目する。かつての失望の家であったこの場所で、変わらなかったものは、薔薇の存在である。このことは、失望の中で薔薇が〈明日の道〉を切り開いたことを表している。では、薔薇が道を切り開くとはどのようなことなのか。エミリーの書いた小説そのものが薔薇のような存在であったことを示す場面を取り上げてみよう。

“You were right not to come to New York,” wrote Miss Royal. “You could never have written *The Moral of the Rose* here. Wild roses won’t grow in city streets. And your story is like a wild rose, dear, all sweetness and unexpectedness with sly little thorns of wit and satire. It has power, delicacy, understanding. It’s not just story-telling. There’s some magic in it. Emily Byrd Starr, where do you get your uncanny understanding of human nature—you infant?” (178)

ここで、エミリーの小説を読んだ人は、彼女の作品が薔薇のようだと述べている。つまり、〈明日の道〉を切り開いたのは、失望の状況の中でエミリーが創作した「薔薇の道徳」だったと考えられる。そして、この作品のタイトルにもあるように、エミリー

は、自分が求める虹や薔薇などの自然が教えてくれることを作品にすることで、テディやディーンに見られるような考え方の変化を、人々に与えたのである。このことから、〈明日の道〉とは、新たな家庭のあり方が受け入れられる社会を意味しており、エミリーが小説家の先に求めていたものは、小説によってこのような社会をつくり出すことであったのだ。

結論

本論文では、エミリーが追うものの対象の分析や、彼女と自然との繋がり、周りの人物との関係性について考察を行うことで、彼女が小説家の夢の先に求めているものが何なのかについて論じてきた。

第1章では、エミリーが虹を追うことの意味についての考察を行った。まず、虹について、彼女の追う虹が小説家の夢であると仮定し、虹の終わりを探すという行動には、小説家となった後に何を成し遂げたいことを追求すること、またそれが不明瞭であること、そして虹が自然現象であることで、彼女の追い求めるものの鍵となるものが身近に存在し、それが目印となっていることという三つの意味があることを論じた。

第2章では、「白鷺」と『赤毛のアン』を取り上げ、本作との比較を行った。「白鷺」と本作との比較では、まず両者の自然描写に注目し、自然には、外の社会に出て自分の周りの選択肢を見たいという女性の想いが示されていることを論じた。また、シルビアとエミリーが、自然観察を通じて自分が求めているものを明らかにしていったことから、自然が彼女たちを突き動かす存在となっていたことを論じた。次に、白鷺のカップルがともに外へ羽ばたくあり方と、夢の中でエミリーがテディを導くあり方の比較を行い、これが家庭の内側と外側の間に壁をつくらず、互いに手を差し伸べ、先導する男女の関係性を望んでいることを表していると論じた。また、『赤毛のアン』と本作の比較では、アンの家庭と、エミリーとディーンの関係性の比較を行い、男女がお互いのあり方を受け入れ、肯定することで良好な関係が築けることを論じた。

第3章では、薔薇がエミリーの希望と失望の二つの意味を持っていること、また薔薇の中には虹の意味合いがあることを論じた。また、〈明日の道〉の先の失望させられない家に注目し、これが家庭の中における男性と女性の関係性に失望をさせられることがないという意味であることを明らかにした。また、この道が新たな社会を、薔薇がエミリーの小説を意味していることから、道の先にある家に薔薇が咲いていることが、エミリーの小説が新たな社会を切り開いたことを意味していると論じた。つまり、

エミリーが小説家の先に求めていたものとは、自分の書いた小説によって、新たな社会を切り開くことであったのである。

引用文献

Jewett, Sarah Orne. "A White Heron." *A White Heron and Other Stories*, Houghton Mifflin, 1886, pp. 1–22.

Montgomery, Lucy Maud. *Anne of Green Gables*. 1908. Bantam, 1992.

———. *Emily's Quest*. Bantam, 1983. (ルーシー・モード・モンゴメリ『エミリーの求めるもの』村岡花子訳、新潮社、1969 年)

『余った女たち』から読み解くヴィクトリア朝の女性の人生

藤井 朱音

序論

ジョージ・ギッシング (George Gissing) の小説『余った女たち』(*The Odd Women*) は 1870 年代というヴィクトリア朝後期のイギリスが舞台となり、1893 年に出版された作品である。この物語のタイトルにもなっている “odd women” 「余剰の女」とは「19 世紀末、イギリスで男女間の大きな人口差が生じ (たとえば 1891 年においては、男 1406 万人に対し、女 1494 万 2000 人)、配偶者を得られない女性」(上田、256) たちのことを指している。“odd women” の発生は男女の死亡率の違いや、独身男性の海外移住、上流、中流階級の男性の晩婚化などが要因となっていた(安東、689)。そしてこの結婚適齢期年齢の女性の人口余剰により、結婚によって女性の身分と生活が安定するというヴィクトリア朝の社会システムが機能しなくなったことが社会問題となった。

この社会システムの特徴には一つ目に女性の相続権がなかったことがある。1925 年に遺産管理法が成立するまで、遺言等による例外はあるが資産の相続は基本的に長子相続制を中心としており、この長子は男子を意味していた。二つ目は女性教育のあり方である。女性に高等教育を受ける権利は認められず、女子教育は良妻賢母の育成をめざし、男性に理想の花嫁として選んでもらえるような「たしなみ」を身につけるためのものであった。『余った女たち』に登場するマドン姉妹の父親であるエルカナ・マドン (Elkanah Madden) も、自分の娘たちには職業に就くための教育ではなく、身分にふさわしい教育を受けさせることが最善であると考えていた。最後に、女性の働き口の少なさと低賃金の問題である。ミドルクラスの女性たちにとって、自分たちの品位を落とすことなく経済的自立ができたのはガヴァネスという住み込みの家庭教師だけであった。そしてこの職の給料は「年に 15 ポンドから 100 ポンドの間で、平均は 20-45 ポンド」(川本、33) であり、この年収では自活できず、結局兄弟や親戚の援助に頼らざるを得ない。以上のように、未婚女性にはほとんど財産がないこと、働いて自立しようと思っても職業に就くための知識や能力が欠けていること、ミドルクラスの女性にとって恥ずかしくない仕事が低賃金のガヴァネスしかないことなどから、結婚をして男性に経済的安定を保証してもらうことが女性にとっての幸せと結びついたと考えられる。ヴィクトリア朝を生きた多くの女性にとっての結婚の重要性を念頭に

置いて再び女性の人口余剰問題に目を向けると、この現象の深刻さが理解できる。

では、いわゆる「余った女」である未婚女性たちは皆不幸な生活を送ったのであろうか。もし違うのであれば、何を根拠に自分の人生は不幸ではないと感じたのか。そもそもヴィクトリア朝の女性の幸せと結婚は結び付けられることが多いが、結婚した女性たちは全て自身の満足した生活を送っていたのだろうか。

本論文では、ギッシングの小説『余った女たち』における未婚女性と既婚女性の二人の登場人物を分析することで、女性の人生を幸・不幸にわけ原因について考察する。第1章では、未婚であるが幸福な結末を迎えた女性の例として、ローダ・ナン(Rhoda Nunn)を取り上げ、彼女の希望ある未来に至った結末の要因を論じる。第2章では結婚はしたが不幸な結末を迎えた女性の例として、モニカ・マドン(Monica Madden)を取り上げ、彼女の置かれた状況を分析し、死という最悪の結末に至ってしまった原因を論じる。

第1章 暴走する集団の規範

本章では、新しい女として女性の解放のために活動していたローダ・ナンについて論じていく。初めに結婚や恋愛を否定し続けていた彼女の考えは本来の意図から離れていたものであったことを明らかにする過程で、彼女に内在していた厳格すぎる集団の規範について考察する。次に、彼女の意志に反したエヴァラード・バーフット(Everard Barfoot)との恋愛からヴィクトリア朝の女性に課せられたジェンダー規範を考察することで、当時の女性にとっての結婚を考察する。最後に彼女が自身の満足に行く人生をスタートできた理由について考察する。

1.1 ローダ・ナンの生い立ち

初めに、ローダ・ナンの生い立ちや人柄について簡単に説明していく。彼女はこの作品の1人のヒロインとして登場する。15歳の頃に革新主義者のウィリアム・スミソン(William Smithson)に恋心を抱き、彼は後の彼女の考え方に大きな影響を与える。30歳になった彼女は、独身であり職業訓練学校の教師として生徒にタイプライターを教えたり、一カ月に一回生徒の前で女性問題に関する簡単なスピーチを行ったりする「新しい女」になっていた。女性が自尊心と自制心を持ち、男性と同様女性も自分にとっての適正な職業を見つけ、それに就くことができる未来を望んでいた。そしてこの実現のためには、知性の乏しい女性や結婚や恋愛を望むような女性は排除し、知性

の優れた女性が団結して戦う必要があると考えていた。ある日、同僚のメアリ・バーフット (Mary Barfoot) の従兄弟であるエヴァラード・バーフットと出会う。彼は法律上の結婚が男性の人生を台無しにするものだと考えており、結婚に対する否定的な思想が一致していた二人は、お互いに惹かれ合うようになる。そんな彼の望む結婚は、法律ではなく、互いを愛する気持ちによってのみ相手を縛ることのできるという新しい形のものであった。しかし、ローダは彼の理想とする新しい結婚形態に肯定的であったにもかかわらず、彼女が婚約を申し込まれたときに望んだのは、これまでの慣習的な法律上の結婚であった。この意見の対立により、最終的に婚約が解消し、ローダは独身生活を続けることになる。

1.2 ローダが定めた厳格すぎる集団規範の分析

ローダは女性の活躍できる職種の拡大を目標とし、これを実現させるため同じような志を持つ女性の教育に励んでいた。当時、女性の立場が低かったため、並大抵の努力では彼女の目標を実現できないと考え、恋愛や結婚を真っ向から否定していた。これは物語随所で彼女の態度からも明らかである。例えば、男の愛人となり学校から姿を消した元職業訓練学校の生徒のベラ・ロイストン (Bella Royston) のことを “The Miss Royston represents the profitless average -no, she is below the average” (67) 「ロイストンさんは役立たずの並の (女性の) 代表です、いや、彼女は並以下です」と非難している。たとえベラのように知性はあっても、一度でも自制心を失い欲に流れてしまった女性はローダの中で救いようのない堕ちた女とラベリングされ、軽蔑の対象となるのだ。男に惑わされない自制心を持つ女性を内集団とみなし、それができない女性を外集団としている。この自制心が集団の内外を分かつ要因となっているため、一度でもこの規則を破ったものは集団の外に放り投げられてしまう。現在の彼女は、目標を達成することではなく、自分が定めた集団の規範を徹底して守ること、またそれに反した人間をただちに集団から追い出すことを重要視しすぎている。

そして、ローダは男性中心社会と戦い、女性の解放を目指していたのにもかかわらず、この女性にはローダの認めるごくわずかな女性たちしか含まれていない。男性に比べて女性への制限が多く存在していた社会に疑問を持ち、女性の自由を獲得することで男女平等を目指していた彼女の中には、無意識のうちに同性の分断につながるような思想が内在していたのである。同僚のメアリはローダのこの考え方を危険視し、警告している。このことは、“Your zeal is eating you up. At this rate, you will hinder our purpose” (60) 「あなたの熱意が暴走しています。このままだと、あなたが私たちの目

標を妨害することになるわよ」や “If our friends gets to think of us as fanatics, all our usefulness is over. The ideal we set up must be human” (69) 「もしも私たちの友人に、私たちが狂信的だと思われたら、私たちの役立つことは全てダメになるわ。私たちが掲げる理想は人間的じゃなきゃいけないのよ」という台詞からも判断できる。また、この思想を持っていた頃のローダから職業訓練学校への入学を勧められたモニカは、“To put herself in Miss Nunn’s hands might possibly result in a worse form of bondage than she suffered at the shop; she would never be able to please such a person, and failure, she imagined, would result in more or less contemptuous dismissal” (41) 「ローダの手中に身を置くと、今店で苦しんでいるよりも、もっと激しい行動制限が課せられるかもしれない。こんな人物を喜ばせることは絶対できないだろうし、失敗すればいずれ軽蔑されて、追い出されることになる」と想像した」と賛同できない様子を示している。女性の解放のためにはこの目標に賛同し、共に立ち上がる仲間を増やすことが重要となる。しかし、ローダの恋愛や結婚を真っ向から否定する姿は非現実的であるため、モニカのようにこの理想に共鳴する女性は少なくなるだろう。だからこそメアリはローダの考えを危険視していたのである。しかし、ローダはまだ、この考えが彼女たちの目標である女性の解放から離れてしまうことに気づいていなかった。

1.3 女性が結婚を望む理由

ローダはメアリの主張を受け入れることができず、恋愛や結婚を認めることはメアリの人間的甘さであると言う。やはり、ローダにとって恋愛や結婚を望む女性は自制心の欠如と見なされ、集団から追い出さねばならない対象となってしまうのである。しかし、自制心があると自負していたローダ自身が意図せずエヴァラードとの恋に落ちたことで、女性が恋愛や結婚を望むのは単なる自制心の欠如が原因ではないことに気づく。エヴァラードとの法律上の結婚、つまりごく普通の夫婦の関係を望んだ彼女はこの理由を “It was the only way of making sure that you love” (296) 「あなたからの愛を確信するには、それしかなかったのです」や “Perhaps I never felt entire confidence in him” (324) 「きっと、彼のことを完全には信頼していなかったのでしょう」と語っている。彼女はそんな自分を弱いと責めていたが、これは伝統的なジェンダー格差から生じる不安の一種だと言える。その中でも今回のローダの不安は結婚可能年齢と行動範囲の違いが起因していると推測できる。

男性は年を重ねても、経済力さえあれば結婚相手に事欠かない。加えてその経済力は年を重ねるごとに増しやすい。一方女性は若さと容貌に価値があり、男性よりも出

産可能年齢も短い。限られた職業のほとんどは低賃金であり、経済力が増す見込みはほとんど無いのに加え、たとえ経済力があっても結婚に結び付くわけではなかった。アリスやヴァージニアのように低賃金かつ長時間という過酷な労働環境で働く女性たちは、心身ともに衰え、結婚適齢期を逃し、結婚から遠のくばかりである。また、ローダとエヴァラードを見てわかるように、男女間での行動範囲は大きく異なる。エヴァラードは旅好きで各国を回遊するように、一人で自由に自分の足で世界を回り、友好関係を広げられるのが男性である。一方、女性の行動範囲は限られている。街を付き人なしに歩けば娼婦と間違われ、一人で汽車に乗れば奇異の目で見られる。子どもを産めばさらに行動に制限が生じるであろう。ジェンダー規範がもたらす男女差により、女性の未来が閉塞的になるのに対し男性の未来は自由である。新しい世界を次々と広げ、これから先も多くの女性との交流の機会があることエヴァラードからの愛が、変わらずローダに注がれ続けることをどのように信じれば良いのだろうか。エヴァラードの求める事実婚は、ローダを含む当時の女性にとって相当な信頼と覚悟がなければ受け入れられるものではなかったことを考慮しなければならない。

伝統的なジェンダー規範による選択肢の少なさから、世間一般の女性たちは男性や結婚を選んでしまう。そのため当時の規範的な女性のように結婚や恋愛を望むことは、自制心の欠如という女性の弱さが直接原因になっているのではなく、そうせざるを得ない社会的状況が背後にあることも見逃してはならないのである。

1.4 ローダの葛藤

一方でやはり、これまで築き上げてきたローダの信念は健在であり、世間一般的な女性と同等の要求をしてしまったことに苦悩している。その様子はエヴァラードからの連絡が途絶えた後の彼女の様子にも表れている。

Now she whispered the name of her lover with every word and phrase of endearment that her heart could suggest; the next moment she cursed him with the fury of deadliest hatred. In the half-delirium of sleeplessness, she revolved wild, impossible schemes for revenging herself, or, as the mood changed, all but resolved to sacrifice everything to her love, to accuse herself of ignoble jealousy, and entreat forgiveness. (313–14)

今、恋人の名前を、思いつくすべての愛情の言葉や言い回しでささやくかと思うと、次の瞬間には、ありったけ増悪をこめて、怒り狂って、ののしった。眠れず半ば興奮状態にあり、復讐のために、狂気じみた実行不可能な計画に思いを

めぐらすかと思えば、気が変って、愛のためにすべてを捧げ、愚かな嫉妬をした己を責め、許しを乞おうと決意しそうになった。

これまでの築いてきたもの全てを捨て去りエヴァラードの元へ行きたい気持ちと、集団から排除し続けてきた女性と同等になってしまうことへの抵抗が現れている。対極に位置していたはずの外集団のローダと、内集団のローダが彼女の中に共存したことで彼女は苦しんでいるのだ。境界線の外側へ足を踏み入れることは女性の自制心の有無というその人自身だけの問題ではないことに気づき、これまで自己の居場所を確立するために頼ってきた境界線が揺らぎ始める。ローダ自身がこれまで非難してきた伝統的な結婚に甘んじてしまう女性になったことで、徹底的に集団から排除してきた女性たちは、本当に排除に値するのかを省みる機会にもなったのである。

1.5 ローダの変化

しかし、最終的にローダは葛藤から抜け出し、女性に対し寛容な姿勢を取ることができるようになっている。この葛藤を解消できたのにはモニカの姉のヴァージニア・マドン (Virginia Madden) と職業訓練学校の中でもローダが信頼する優秀な生徒であるミルドレッド・ヴェスパー (Mildred Vesper) とウィニフレッド・ヘイヴン (Winifred Haven) が大きく関わっている。ヴァージニアの存在によりローダは本来の目的に沿った外集団を再確認し、訓練学校生の二人との関わりの中でこれを確信に変えたのだ。

ヴァージニアは家庭の経済難から父親の死んだ 17 歳のときから 34 歳まで劣悪な環境下で労働し続けており、その苦しみからの解放を求め、飲酒行為に依存してしまった女性である。目標や意志を持たない人が落ちぶれていった様子を目の当たりにし、彼女の本来の目的を再認識する様子が次のように描かれている。

Will! Purpose! Was She not in danger of forgetting these watchwords That poor creature's unhappiness was doubtless in great measure due to the conviction that missing love and marriage she had missed everything. So thought the average women, and in her darkest hours she too had fallen among those poor of spirit, the flesh prevailing. But the soul in her had not, finally succumbed. Passion had a new significance; her conception of life was larger, more liberal; she made no vows to crush the natural instincts. (322)

意志！目的！この標語を彼女（ローダ）は忘れかけていた危険はないだろうか。
...あのかawaiiそうな女の不幸は、明らかに、ほとんどが恋愛も結婚もできなか

ったために、すべて失われたと信じていたことに原因があるのだ。普通の女はそう考える。そして、彼女も非常に暗い気分にいるときは、肉欲が勝って弱い気持ちに襲われてしまったときもあった。しかし、彼女の心は結局負けなかった。情熱は新しい意味を持った。彼女の人生観は広がり、豊かになった。自然な本能を抑制しようという誓いなどは立てていない。

元来のローダの目標は意思、目標を持ち、落ちぶれた女性にならないこと、そして堕ちた女になってしまった原因を恋愛や結婚ができなかった不運に求め、現状を変える努力を一切しない女性にならないことであることが上記の引用からも明らかである。つまり、男尊女卑的なジェンダー格差が普遍的に存在する社会に疑問を持たず、状況を変える努力も無くその現実に対して不満を言うような女性が、本来のローダにとっての外集団であったのだ。ヴァージニアを通し彼女が本来なりたくないと考えていた女性の在り様を直に見ることで、これまでの恋愛や結婚を望む女性たちを全て集団外に位置付けていた姿勢は本来の目標からは逸れていたことに彼女は気づくことができたのである。

そして職業訓練学校生の二人の生徒がローダの本来あるべき居場所の存在を示してくれたことでこの気づきが確信に変わったと言える。彼女たちにとってローダはお手本となる先生である。彼女たちが辛い時や挫けそうなときはローダの姿や彼女の激励の言葉を思い出し、再び立ち上がる。彼女を待つ人々の存在と自分の本来の居場所があることを、二人から直に感じたのである。

また、恋愛や結婚の有無はローダ本来の目的とは関係ないことを確信できたために、モニカに対し救いの手を差し出すことができたのである。ローダがモニカに対し職業訓練学校の生徒と同じように激励の言葉をかけたとき、“*She felt her power in quite a new way, without touch of vanity, without posing or any trivial self-consciousness*” (348) 「彼女はこれまでに感じたことのない、うぬぼれや気取り、無意味な自意識無しの力を感じた」とあるように、彼女にとってこの行動は建前や虚栄のものではなく本来の目的に沿ったごく自然的なものであることが推測できる。

ローダは自分の集団を乱す存在の排除に意識が向いてしまい、本来の目標から逸れた行動を取っていた。彼女のこの行動は女性の解放から遠ざかるものとなっていたのである。しかし、ローダが想定外の恋をしたことで、女性の結婚願望には単なる自制心だけでなくジェンダー規範による女性の選択肢の狭さが関与していたこと、そしてこれまで必須だと疑わなかった集団の規範は重要視しなくてもよいものであったこと

に気づく。本来の目標が何であったかを確認する過程で、ローダの居場所の存在が変らずあることを再確認し、彼女は元来の目標達成のために再び歩き出すことができたのである。たとえ独身であっても、人生に目標を見出し、共にその達成へと迎える仲間がいて自分の居場所があることで、彼女は自身が満足する人生のスタートがきれたと言える。

しかしながら、ローダのように 同志や仲間に恵まれている人間が全てではない。また、様々な集団に出入りすることで自分自身が望んでいる集団を見つけられない人間も存在する。それが、モニカ・マドンである。次章ではそんなモニカの置かれた状況について分析していく。

第2章 ジェンダー規範を破った既婚女性に対する社会的制裁

本章では、結婚はしたものの不幸な結末を迎えた女性の例としてモニカ・マドンを取り上げ、彼女が死に至った理由が夫であるエドモンド・ウィドウスン (Edmund Widdowson) から押し付けられるジェンダー規範への違和感と、ミドルクラス、ワーキングクラス、そして新しい女として女性解放運動を行う集団のそれぞれに関与したことで生じた彼女の立場の曖昧性の2つにあると仮定し、これについて論じる。

2.1 モニカ・マドンの生い立ち

初めにモニカ・マドンについて説明する。マドン一家の末っ子として産まれた彼女は、誰もが認める美人であった。幼いころに両親を亡くしたため、15歳から自活することになる。ガヴァネスとしての才能は無く、ロンドンのウォルワースにあるスコッチャー商会で働くことになる。しかし母親譲りの美しさと生まれながらの品の良さがあり、商会で働く女店員たちに馴染めていない。

21歳になったときローダから職業訓練学校への入学の提案を受けるが、未婚で貧しい暮らしをする姉のアリス・マドン (Alice Madden) とヴァージニアの姿を見て育ったモニカは、ローダのように結婚せず自立した暮らしをすることに抵抗があった。姉二人に惨めな暮らしに自分の将来を投影し、公園のベンチで憂鬱な気分になっていたとき、エドモンド・ウィドウスンという40歳くらいの男性に声をかけられる。この男の振る舞いの上品さや身につけている物の上等さから、警戒心が解け会話する仲になる。商会での仕事を辞めローダたちの訓練学校に通うも、結局、姉たちのような生活を送ることへの恐怖心から、経済力のあるエドモンドとの結婚を選択する。

結婚初期は幸せな生活を送っていたが、徐々に彼の亭主関白的な束縛が勢いを増し、一人での外出や友人に会うことを制限するようになる。モニカは自分も一人の人間であり、自由に行動する権利があるということをエドモンドに理解させようとするがその思いは届かない。そんな結婚生活に限界を感じていたとき、後に不倫関係となるビーヴィス (Bevis) という青年に出会う。しかしビーヴィスのモニカに対する気持ちは火遊び程度のものであり、彼女と共に生きていくつもりはさらさらなかった。結局、エドモンドのいる家に帰ることになるが、彼女の不倫がエドモンドにばれてしまう。

モニカにとってこの不倫は彼女の自由な行動を束縛するエドモンドから逃げるための手段でしかなく、逃げられない環境に追い込まれた自分は悪くないことを主張するもエドモンドは理解してくれない。二人は別居生活を始めるも、彼との子どもを授かったモニカはいつか彼の元に戻り、支配された生活を耐えることを一人決めていた。姉以外の誰とも会わず、この不倫の理由や真実を隠す日が続く中、モニカはローダと会って彼女に少しずつ真相を打ち明けた。このときモニカの妊娠を知っていたローダは、お腹の中にいる子のためにも健康になるべきであり、モニカはふつうの女性と違って知性があり、再び自分たちの仲間として戦う女に戻らなければならないと彼女に励ましの言葉をかける。これにより、一時的ではあるがモニカに明るさが戻る。しかし勇気を振り絞りエドモンドに事件の真相を精一杯伝えるも、彼からの信頼を再び確立することは叶わず、生まれてきた子供の父親が彼であると確信させることさえできなかった。結局、モニカはエドモンドから誤解されたまま、この世を去ってしまう。子どものことも愛することができないエドモンドは、子育てをアリスとローダに任せることになる。以上がモニカ・マドンの生涯である。

モニカはこの作品に登場する主要キャラクターの中で、唯一作中で死んでしまった人物である。彼女がこのような結末を迎えるに至った理由は、第一に夫のエドモンドから押し付けられるジェンダー規範を受け入れられなかったことが考えられる。そして第二に、彼女がどの女性集団にも馴染むことができなかったのにも関わらず、それぞれの集団の思想が彼女の考えに影響し、曖昧な立場になってしまったことが原因となっている。

2.2 男性中心社会の中で創り出されたジェンダー規範

初めに、エドモンドから押し付けられたジェンダー規範から分析していく。男尊女卑的な亭主関白ぶりを見せる夫エドモンドから押し付けられる妻の理想像は、男性は許されることを女性には禁止させるジェンダー規範の押し付けの典型例であった。ヴ

イクトリア朝の社会はこれが常識とされる世の中であったため、夫が妻を自分の支配下に置くことに対して疑問を持つことは無かった。例えば、この感覚は以下で引用する文によく現れている。

... yet, in his view of their relations he was unconsciously the most complete despot, a monument of male autocracy. Never had it occurred to Widdowson that wife remains an individual, with rights and obligations independent of their wifely condition. Everything he said presupposed his own supremacy; he took for granted that it was his to direct, hers to be guided. A display of energy, purpose, ambition, on Monica's part, which had no reference to domestic pursuits, would have gravely troubled him; at once he would have set himself to subdue, with all gentleness, impulses so inimical to his idea of the married state. (171)

...しかし、二人の関係性の中で彼は無意識のうちに、最も完全な独裁者的な見解になっており、男性専制政治の象徴のようになっていた。ウィドウスン（エドマンド）にとっては妻が一人の人間であり、妻らしい条件とは無関係の権利や義務を持つとは思ってもよらなかった。彼の言うことはすべて、自分の優位性を前提としており、自分が指揮して、妻が従うのは当たり前だと思っていた。モニカが家庭の事情とはかかわりもないところで、行動力や、目的、野心をあらわにすれば、彼はひどく悩んだことであろう。そして、自分の考える結婚生活とは相容れない行動を、優しい態度であっても抑えつけるであろう。（下線は引用者による）

この引用下線部分に直接述べられているように、エドマンドはモニカのことを一人の権利ある人間として扱っていない。また、別の場面で彼女に良い身なりをさせることは彼自身の満足のためであると明確に述べられていることから、エドマンドの中の婚約者の存在とは、人間ではなく、単なる所有物であり、装飾品であることが理解できる。妻を支配し、服従させることが正しいと信じて疑わないのである。ただ、この考えは引用箇所にも記されているように意識的なものではない。なぜ既婚女性は既婚男性には認められている行動の自由を求めてはならないのかとモニカに尋ねられた時、エドマンドは “I am a man; you are a women” (184) 「僕は男で、きみは女なのだよ」というだけで明確な返答をすることができていない。つまり、エドマンドに内在するこのジェンダー規範は、彼自身から生まれたものなのではなく、男性専制政治的な当時の文化や意識、日常的な生活から生まれた社会共通の理念として蔓延っていたものな

のだ。そして男性がこれを一般として受け入れるように、多くの女性もこのジェンダー規範を正当なものとして受け入れていたとも言える。それは、モニカが夫と同じように自由を求めることを“The marvelous thought of between equality man and wife” (199) 「夫と妻が対等であるという、驚くべき思想」というように、規範への抵抗が奇異的なものとして描かれていることから理解できる。この社会の仕組みを語り手が“... he himself represented the guardian male, the wife-proprietor, who from the dawn of civilization has taken abundant care that woman shall not outgrow her nonage” (220) 「...彼もそうであるように、男は保護者の立場にあり、妻所有者である。男は文明の始まりから一生懸命に気を配って、女が幼稚な状態から成長しないようにしてきた」と述べるように、女性の教育や仕事領域を家庭内に留めようとするヴィクトリア朝の特徴が、ジェンダー格差に疑問を持たず受け入れることができる社会認識の幼い女たちを生み出していたのだ。ジェンダー規範を根拠もなく正当なものだと言い切ってしまうエドマンドのような男性と社会に対し疑問を持たない当時の多数の女性たちはヴィクトリア朝の社会的産物であると言える。

2.3 立場の曖昧性

次に、モニカの立場の曖昧性について、モニカ自身の言葉と行動や他者からの評価を分析しながら、論じていく。モニカはミドルクラスの淑女として育てられた一面、ショップガールというワーキングクラスの仕事をしていた一面、ローダやメアリから影響を受けた「新しい女」としての革新的な一面を併せ持っている。そのため、階級的にも思想的にも異なる三つの集団に属すると同時に、部外者のように扱われている。

モニカ自身の階級意識は、スコッチャー商会に淑女はいるのかとローダに聞かれたときのモニカの答えに表れている。“None, at Scotcher’s. They nearly all come from the country. Several are daughters of small farmers and those are dreadfully ignorant” (39) 「スコッチャー商会に淑女は1人もいません。彼女たちのほとんどが田舎出身です。小さな農場の娘が何人かいるのですが、ものすごく無知なのです」と説明するように、ショップガールたちのほとんどはワーキングクラスであることが分かる。ヴィクトリア朝の社会は階級によって格差があり、これにより生活習慣や考え方に違いがあったことから、ミドルクラスの女性のたしなみとしての教育を受け育ったモニカが、ショップガールとして働くワーキングクラスの女性たちに馴染めないことは無理もない。実際ショップガールたちの中では夜中に街へ出かけること、街で見ず知らずの男性と知り合うことなど、ミドルクラスの女性たちからすればあり得ない行動の多くが日常茶飯

事であり、モニカがこれに驚いている様子が描写されている。そんな彼女たちにモニカが嫌悪感を示すのと同じように、ショップガールの女性たちもモニカを友好的に扱わなかった。モニカと同じ部屋で寝泊まりする五、六人のショップガールたちはモニカがエドモンドと歩いていたことを話題に取り上げ、冷やかす場面がある。たとえ同じ行動であっても動作主がモニカに変わるだけで批判の対象になっている。これは、ショップガールたちがモニカのことを同じ集団の一員と見なしていないことの表れである。また、ミドルクラスの女性としてワーキングクラスの行動規範を批判していたモニカが、ワーキングクラスの女性のような行動をしたことも非難の対象になった原因である。

ただ、モニカ自身も彼女たちを軽蔑の目で見ているため、彼女がショップガールたちに馴染めないことを問題視する必要性は少ないかもしれない。ここで着目すべき問題となるのは、彼女たちと過ごすうちにミドルクラスとしてのたしなみを身につけていたモニカにも、ショップガール特有の自由で世間の常識に囚われない大胆な行動をすることに抵抗がなくなりつつあったことである。公園で知り合ったエドモンドと付き合い始めるというのも、ミドルクラスの女性であれば考えられない行動である。モニカは、ミドルクラスの気品を落とさず生きること、ショップガールたちのように気品とは全く無縁に生きることでもできなかったのである。

この時点で既にモニカの立場は曖昧であるが、ローダやメアリを代表する新しい女として女性の解放を目標とする女性集団にもモニカは関与していたことでさらにその曖昧性が増すことになる。最終的には独身生活の恐怖からエドモンドとの結婚を選ぶことになるが、結婚後のモニカは彼女自身でも気づいていなかったがローダやメアリから受けた職業訓練学校での教養を全て身につけていたのだった。モニカのエドモンドに対し、既婚女性の自由の権利を主張する様子を、語り手は“*Monica in truth owed the sole bit of real education she had ever received to those few weeks of attendance in Great Portland Street. Circumstances were now proving how apt a pupil she had been, even against her will*”

(198)「モニカが身につけた1つの本格的な教育は、実は数週間のグレート・ポートランド・ストリートでの授業のおかげであった。彼女がいかに優秀な生徒であったかは、彼女の意思に反していても、状況が証明していた」と褒めている。ここから分かることは、既婚者になったにもかかわらず、男性から離れ自活するローダやメアリたちの思想が彼女自身の中に存在しているということである。モニカは経済的自立こそできなかったが、精神的自立を求めるようになったのである。既婚女性として夫の言いなりになることも、完全に男性から離れ自活を決意することもできず、またしても

自身の立場を定めることができないでいる。様々な集団に関与し、各集団の良い面、悪い面のどちらも体感することで、モニカは自分の立場を決めきれなくなってしまったのである。

2.4 モニカの死

ではこれまでに述べてきた立場の曖昧性はモニカに一体どのような影響をもたらしたのだろうか。これこそが、モニカが死という最悪の結末を迎えた要因であると考えられる。どの集団規範にも賛同しきれないモニカは自他ともに一つの集団の一員として認められない。そしてジェンダー規範や集団規範で形成されたこの社会や集団に疑問を投げかけることができる彼女のような人物は集団からの排除対象になってしまう。また集団に属することはアイデンティティの確立に結び付いており、心の帰属先となり、自分の居場所となる。アイデンティティは様々な意味を包括しているが、これを提唱した精神分析学者のE・H・エリクソンは「自己の存在証明」だと言う。自分が何者であるのか、何のために生きているのかを明確にする居場所がないモニカの人生が明るいものでないことは悲しくも予測できてしまう。ローダがモニカに対し、どうして死にそうだと心配するのかと尋ねられたとき、モニカは“*It’s more a hope than a fear – at most times. I can see nothing before me. I don’t wish to live*” (348) 「心配というより希望なのです—いつも思っています。この先何の希望もありません。生きたくありません」とはっきりと言葉を露わにする。曖昧な存在であるモニカはどの集団にも居場所を見つけられず、生きることに意味を見出せない彼女にとっての希望は、死ぬことでそんな世界から姿を消すことだけであったのだ。

2.5 「新しい女」としてのモニカ

しかし、このどの集団にも属せないモニカという存在は、これまでにない新たな集団の誕生とも言えるのではないだろうか。語り手が夫婦間において妻も自由の権利を求めることを“*The marvelous thought of between equality man and wife*” (199) 「男と妻が台頭であるという、驚くべき思想」と述べていることから、モニカはこれまでの規範から逸脱するような思想の持ち主だと言える。モニカの目標となりかけていた既婚女性の自由の権利の獲得は、これまでの新しい女たちよりも革新的な目標であったのだ。

坂田薫子は「...1890年代に数多く書かれた『ニュー・ウーマン・ノベル』の『新しい女』など、ヴィクトリア朝文学では社会の秩序を乱す（あるいは乱しかねない）ヒロインたちは死をもってその代償を払わされた」(155)と述べるように、社会に対し

疑問を持ち抵抗できる人間、つまり規範を破ることができる人間は、従来の規範から逸脱する反逆者と見なされ、死という社会的制裁を受けることになる。しかし、こういう人間たちが同じ思想を持つ仲間を見つけ、手を組むことでダブル・スタンダードや従来の規範を変えられる新たな集団が形成されるのだ。そう考えると、モニカが死に至った理由は結婚生活においても自由を手放さない、妻も一人の人間であることを夫に認めさせるという当時の新しい女よりもさらに先進的な考えを持っていたこと、そしてこの考えに賛同し、共にアイデンティティを形成できるような仲間や集団がなく社会から反逆者のレッテルを貼られ排除の対象となってしまったためであると言える。

物語終盤、ローダが考えを変えたことでモニカが再び新しい女の仲間に戻る可能性が見える。しかし、手を差し伸べられたその時のモニカにはもう規範に抵抗できるほどの力はほとんど残っていなかった。もし、ローダが味方になったのが、モニカが既婚女性の自由の権利をエドモンドに主張していた頃であったとしたらモニカの未来は全く違っていたのではないだろうか。

結論

本論文では『余った女たち』に登場する二人の女性に着目し、女性の人生を幸せにする要因を考察した。

第1章では新しい女として女性の解放を目標に活動する集団にいたローダを分析した。女性の解放のために情熱が暴走し、たとえ知性があっても恋愛や結婚を望む女たちを集団から徹底して除外していた。ここにローダが定めた不当な集団規範が存在していた。しかし、女性が結婚を望むのは個人的な単なる欲求のみではなく、ジェンダー規範から生じた女性の生きづらさが関係していた。自分の作った集団規範が運動の目標達成の妨げになっていたことに気づき本来の目標に立ち帰れたこと、集団内に明確な居場所があったことでローダは自身の満足する人生のスタートを切れたと言える。

第2章では、様々な集団に少しずつ関わることで立場が曖昧になってしまったモニカについて分析した。ミドルクラスの女性としてのたしなみ、ワーキングクラスのショップガールから影響を受けた行動の変化、職業訓練学校で身につけた革新的な思想、それら全てを持ち合わせているモニカは自分の立場を一つに決めることができない。居場所がないことで自分の存在理由が不明瞭になる。これによりモニカは死に至ってしまう。

世間一般には女性にとっての幸せは結婚だと言われていたが、女性たちを見ると幸せな人生と結婚が直接結びついているわけではないことが分かる。それよりも、ローダとモニカを見ていると自分の人生に目標を掲げ、居場所を見つけられるかどうか重要であることが分かる。また、女性にとって不当な規範が多く存在していたヴィクトリア朝では、目標を共に達成しようと手を取り合う仲間や集団がいることも重要である。既婚か未婚か、職に就いているのかいないのかという差異によってこだわるのではなく、その人自身に目を向け、手を差し伸べることでモニカのように曖昧な立場にいる人間を救うことができるのかもしれない。

引用文献

George, Gissing. *The Odd Women*. Oxford World Classics, 2015.

安東伸介その他編『イギリスの生活と文化事典』研究社、1982年。

上田和夫編『イギリス文学辞典』、研究社、2004年。

川本静子『ガヴァネス（女家庭教師）』、中公新書、1994年。

坂田薫子「モニカ・マドンという生き方—『余った女たち』における働く女性たちの表象」『ヴィクトリア朝文化研究』、第16号、2018年、153–176頁。

「主体」としてのオフィーリアの物語

安田 萌々花

序論 『ハムレット』の概要と本論の目的

『ハムレット』(*Hamlet*)はウィリアム・シェイクスピア(William Shakespeare)によって1600年頃に執筆されたとされる、彼の四大悲劇のうちの一作品である。高橋・河合の論述を参考にすると、1602年7月26日に「宮内大臣一座によって最近演じられた『デンマーク王子ハムレットの復讐』という本が書籍商組合に登録されていることから、初演は遅くとも1602年とされる(19)。『ハムレット』には三つのテキストが現存するが、第1四つ折本(Q₁)は海賊版とされているため、信頼性の高い第2四つ折本(Q₂)と第1二つ折本(F)をつなぎ合わせた折衷版をテキストとして使用するのが一般的である(3-4)。よって、本論文もこのテキストに依拠する。

『ハムレット』の物語の大筋はデンマークの王子ハムレット(Hamlet)が、王であった父を毒殺した上に母ガートルード(Gertrude)を妃とした叔父のクローディウス(Claudius)に復讐するというものである。父の亡霊の告白により叔父が父を殺めたことを知ったハムレットは狂気を装いつつ復讐の機会を窺う。内大臣ポローニアス(Polonius)の殺害やその娘でありハムレットの恋人のオフィーリア(Ophelia)の死などを経て、クローディウスがハムレットを殺すために企画した、オフィーリアの兄レアティーズ(Laertes)とのフェンシング試合を機にハムレットは復讐を果たすが、自身もレアティーズの剣に塗られた毒で死亡する。

本論の目的は、オフィーリアの発言や行動、そして狂気が『ハムレット』において持つ意味や役割を突き止め、彼女がその物語を語ることでできる存在であるということを確認にすることである。本論文では、ある登場人物の物語を「語る」ことを、その人物の存在意義や存在価値を、他の登場人物に依存せず表現することとする。オフィーリアを彼女自身の物語を持たない脇役として位置づけたイレイン・ショーウォルター(Elaine Showalter)らに挑戦することも目的の一つとしつつ、具体的には『ハムレット』の材源とされるサクソ・グラマティクス『デンマーク人の事績』(Saxo Grammaticus, *Gesta Danorum*)のオフィーリアにあたる女性との比較や、男性の抑圧の対象でありつつも主体でもあるというオフィーリアの二つの面への言及、彼女の狂気場面が舞台上で果たす役割についての論述などを通して目的を達成することを試みる。

第1章 オフィーリアの物語を「語る」ことの可能性

オフィーリアはしばしば従順な女性であると評されてきた。家父長制の抑圧への抵抗を試みる『ロミオとジュリエット』(*Romeo and Juliet*)のジュリエット(Juliet)や『ヴェニスの商人』(*The Merchant of Venice*)のポーシャ(Portia)、『オセロー』(*Othello*)のデズデモーナ(Desdemona)などといったシェイクスピアの他作品のヒロインたちと比較され、オフィーリアは圧倒的に従順な女性とみなされてきたのである。実際オフィーリアは家族の中で、父と兄の二人の男性に抑圧される「娘」という、家父長制下では非常に弱い立場に置かれている。そして、彼らの抑圧や権力に反発するような行動を表立ってとることがないため、オフィーリアは従順な女性であるという評価を下されてきたのである。一方、上記したシェイクスピアの他作品のヒロインたちはオフィーリアと対照的である。例えばジュリエットとデズデモーナは愛する人と結婚するために、そのことに反対する父の意見を押し切っている。これは父に恋人との仲を引き裂かれそうになっても反抗せず従うオフィーリアとは真逆である。またポーシャは男性裁判官に扮し機知に富んだ判決を下して夫の友人を救ったり、夫の借金を肩代わりしたりする。対するオフィーリアは恋人からの酷な仕打ちにも反発せず、彼に対し何か働きかけることもほとんどなく受動的である。相対的に見ても、やはりオフィーリアには従順と評価される要因がいくつも存在することがわかる。

こうした背景もあり、これまでさまざまな批評家がオフィーリアをその物語を語ることのできない人物と位置づけている。イレイン・ショーウォルター(Elaine Showalter)は、伝統的なオフィーリア評について“*For most critics of Shakespeare, Ophelia has been an insignificant minor character in the play, touching in her weakness and madness but chiefly interesting, of course, in what she tells us about Hamlet*” (77)「たいていのシェイクスピア批評家にとって、オフィーリアはこの劇において重要ではない脇役であり、か弱さと狂気が感動的ではあるが、当然彼女がハムレットについて語るところがとりわけ興味深いのである」と説明している。つまり、オフィーリア自身の物語ではなくハムレットの物語を語ることが、彼女の存在価値としてしばしば考えられてきたということである。実際に、ジャック・ラカン(Jacques Lacan)が1959年の『ハムレット』に関するセミナーの中でオフィーリアについて話すと言明しておきながら、あくまでオフィーリアを客寄せの材料として利用したにすぎなかったという出来事があった。ショーウォルターはそのことについて次のように述べている。“*when he does mention Ophelia,*

she is merely what Lacan calls ‘the object Ophelia’ – that is, the object of Hamlet’s male desire”

(77) 「彼がオフィーリアに言及する際、彼女はラカンが単に『オフィーリアという対象』、すなわちハムレットの男性的欲望の対象と呼ぶものにすぎない」のだという。ショーウォルターは期待を裏切ったラカンに挑むべく、オフィーリアをハムレットの性的欲望の対象としてではなくあくまで主体として論じることを試みたのである。ここからはショーウォルターによるその試みについて見てゆく。ショーウォルターは“I would like to propose instead that Ophelia *does* have a story of her own that feminist criticism can tell; it is neither her life story, nor her love story, nor Lacan’s story, but rather the *history* of her representation” (79) 「私は代わりに、オフィーリアにはフェミニズム批評が語ることのできる彼女自身の物語があると提案したい。それは彼女の人生の物語でも、恋物語でも、ラカンの物語でもなく、彼女の表象の歴史である」と述べ、オフィーリアの表象の歴史を語ることこそ彼女を「語る」ための解決案だとしている。ショーウォルターはオフィーリアが全 20 場面中 5 場面にのみ登場することや、ハムレットとの恋についての情報が曖昧かつ非常に少ないことなど、彼女の過去を想像するための情報不足を指摘し、ゆえに彼女の悲劇はこの劇の中で下位に置かれていると考えた (78)。ショーウォルターはオフィーリアをあくまで彼女自身の物語を語ることのできない脇役と位置付けており、そのため彼女の表象の歴史に彼女を語る可能性を託しているのである。ラカンに対抗しオフィーリアを主体として語ろうとしたショーウォルターであったが、彼女にとってもオフィーリアはやはり脇役であり、絵画や歌などに描写される対象としての物語しか語ることができなかったといえる。

ショーウォルターが“Ophelia is probably the most frequently illustrated and cited of Shakespeare’s heroines” (78) 「オフィーリアはおそらく、シェイクスピアのヒロインの中で最も頻繁に描かれたり引用されたりしている」と述べているように、オフィーリアが卓越した表象の歴史を持っていることは確かであろう。しかしここでは、本当にオフィーリアを語るには彼女の表象の歴史を語るしか術はないのだろうかという問題提起をしたい。おそらくショーウォルターの主張には、シェイクスピアの翻案の意図を考慮に入れていないという問題がある。シェイクスピアの『ハムレット』の材源とされているサクソ・グラマティクス『デンマーク人の事績』におけるオフィーリアに対応する女性と、『ハムレット』に登場するオフィーリアを比較すると、後者にはシェイクスピアによる大幅な肉付けが見て取れるのである。それを確認するためにまず、材源に登場するオフィーリアのモデルである女性が作中でどのように描かれているのかを見てゆく。彼女は『デンマーク人の事績』の第三の書の一部のみに登場する人

物である。まず彼女はハムレットのモデルとなったアムレート (Amleth) の叔父フエンギ (Feng) による、アムレートを誘惑するという奸計のためにアムレートのもとへ送り込まれ、彼と「添い寝をとげ」(120) だと述べられている。また彼女は、添い寝をしたことについて「このことは誰にももらさぬよう熱心に頼んだ」(120) というアムレートの気持ちを汲み、実際に添い寝について尋ねられても「彼はそのようなことはしなかった」(121) と述べており、それは「子供のとき同じ者に育てられたことがアムレートとその娘を非常に親しくさせた」(120) ためであるということが描写されている。しかし彼女の登場はこのアムレートとの添い寝というワンシーンにとどまり、名前も与えられず「女性」(120) 「女」(120) 「娘」(121) などとしかあらわされていない。また彼女の感情についての言及もないことから、彼女は物語の進行にかかわったり読み手の感情を揺さぶったりすることのない人物だといえる。さらに、『ハムレット』のオフィーリア最大の見せ場である狂気の場面も『デンマーク人の事績』にはないのである。

それに対して、シェイクスピアの『ハムレット』にはハムレットの恋人女性として「オフィーリア」という名前を与えられた女性が登場するし、彼女の登場はワンシーンにとどまらず継続的に5つの場面に見られる。また、詳しくはこれ以降の章で述べるが、オフィーリアは狂気の場面を中心に観客の憐れみを誘うなど、観客の感情へのアプローチが多く見られる人物である。これらのように、材源である『デンマーク人の事績』に登場するオフィーリアのモデル女性ではなく、『ハムレット』のオフィーリアにはある要素がいくつも見られる。つまり、シェイクスピアが翻案の際に意図してオフィーリアに肉付けをしていることは明らかであり、その肉付けされた部分こそ、シェイクスピアがオフィーリアに与えた重要性だといえるのではないか。したがって、オフィーリアにはシェイクスピアが意図的に付与した存在意義や役割があると考えられ、そこに彼女を「語る」ことができるという根拠が見いだせると推測できる。

第2章 抑圧の対象かつ主体としてのオフィーリア

楠によれば、「ルネサンス期の英国は、強力な父権制社会であった。女性は結婚前は父、父がいない場合は兄や後見人といった父に代わる権限をもつ男性の支配の下にあり、結婚後は夫に『従順』に従う義務があるとされていた」。そして「当時の女性に求められた美德は『貞節、寡黙、従順』であった」という(6)。オフィーリアも例に漏れず、周りの男性たちからこの美德を要求され抑圧されている。この章ではまず、美

徳の要求に加え多方面から男性権力者たちの支配を受ける、抑圧の対象としてのオフィーリアを見てゆく。

最初に、ポローニウスとレアティーズという男性の家族からオフィーリアへの抑圧について見てゆく。彼らは美德を遵守する理想的な女性であることをオフィーリアに強要し、彼女の性を支配するのである。その例として、まずレアティーズがオフィーリアに対して貞節を守るよう忠告する次の発言があげられる。

Then weigh what loss your honour may sustain,
If with too credent ear you list his songs,
Or lose your heart, or your chaste treasure open
To his unmas'tred importunity. (1.3.29–32)

そしてもしお前が信じ切ってあの方 [ハムレット] の甘いささやきに耳を傾け、心を奪われ、お前の処女という宝箱をあの方の執拗な懇願に応じて開けてしまったなら、どれだけお前の名誉に傷がつくことか。

また高橋・河合によると、レアティーズのオフィーリアに対する “The charest maid is prodigal enough / If she unmask her beauty to the moon” (1.3.36–37) 「非常に用心深い乙女も、美貌を月にさらしたならば十分にはしたない」という台詞には「女性の sexuality に対する極端な抑圧・警戒・嫌悪」(121) が表れているという。月は貞節の女神ディアナの象徴であるにもかかわらず、その月にすら美貌をさらすべきではないという発言は、オフィーリアの性に対する強い抑圧を意味する。オフィーリアが兄の強い意志によって徹底的に貞操を守ることを要求を受け、性を厳しく抑圧されていることがうかがえる。ポローニウスもまた、“You do not understand yourself so clearly / As it behoves my daughter and your honour” (1.3.96–97) 「お前はわしの娘、そして処女としてふさわしいほど、はっきりと自分の立場を理解していない」と発言しており、ポローニウスがオフィーリアの貞操を重視していることが示されている。

またポローニウスには、オフィーリアの言葉をゆがめることで彼女を抑圧しているという面もある。高橋・河合はポローニウスが、オフィーリアの言った “tenders” 「愛の表現」(1.3.99) という言葉を、商取引における “tenders” (1.3.106) 「申し入れ；入札」の意にすりかえていたり、“fashion” (1.3.111) 「やり方」の意を「最近の流行」(1.3.112) の意に歪曲したりしていると指摘している(127)。自分の意志を伝えることができるはずの発言の機会においても、オフィーリアは言葉をゆがめられ、それが

思うようにできていないのである。ここにも家父長制下で男性に抑圧される女性としてのオフィーリアの姿が表れている。

さらにポローニウスは、オフィーリアとハムレットの恋愛関係自体を否定し、彼女の恋愛における自由を奪うことでオフィーリアを支配する。例えば次の引用にそのようなポローニアスの態度が透けて見える。

OPHELIA. He hath, my lord, of late made many tenders
Of his affection to me.

POLONIUS. Affection! Pooh! You speak like a green girl,
Unsifted in such perilous circumstance. (1.3.99–102)

オフィーリア：あの方〔ハムレット〕は、最近愛情のこもったお言葉をたくさんかけてくださいます。

ポローニウス：愛情だと！ふっ！まるで危険な目にあった経験がない生娘のような発言だ。

素直にハムレットの愛情を享受しているオフィーリアに対し、ポローニウスは軽蔑するような発言をしている。ポローニウスはその後ハムレットがオフィーリアに対して真に愛情を抱いているわけではないと説き、ハムレットとの接近を禁止してしまう。それに対してオフィーリアは“*I shall obey, my lord*”「お言葉通りにいたします、お父さま」(1.3.136)と受け入れる。ポローニウスは貞節という美德をオフィーリアに押し付け、彼女の意志を無視してハムレットとの恋仲を断ち切らせるという仕方でオフィーリアを抑圧しているのである。そしてオフィーリアはハムレットからの愛情を信じていたが、自分の意志を貫くのではなく父に対して従順であり続けたといえる。父に美德を守るよう強要されることで恋を諦めなくてはならなくなったオフィーリアの悲哀は、観客の憐れみを誘うと推測できる。オフィーリアは言葉数が少なく、表面上父や兄に対して従順であるが、観客は舞台上で抑圧され意志を尊重されないオフィーリアを目の当たりにする。つまり観客は、言葉や態度には表出しないが確かに存在するであろうオフィーリアの心痛を想像せずにはいられないのである。シェイクスピアは単に抑圧されるオフィーリアを描いているのではなく、それを描くことを通じて観客の情緒を動かす役割を彼女に付与している。第1章で指摘した通り、この役割は材源のオフィーリアにあたる女性が持たないものであるため、『ハムレット』において重要な点であると考えられる。したがって、オフィーリアの持つ観客の感情を揺さぶる機

能についてもこれ以降は言及してゆくこととする。

次に、オフィーリアの恋人であるハムレットが彼女に対して行う抑圧について言及する。まずハムレットはポローニウス同様、オフィーリアの言葉をゆがめることで彼女を抑圧している。高橋・河合は、オフィーリアが3幕2場245行で使った“keen”という単語に“sharp-tongued”、“bitter”「辛辣な」の意と、“sexually eager”「性的に熱心である」の意があることを示し、オフィーリアは前者の意味で言ったにもかかわらずハムレットは後者の意味で解釈したと述べている(243)。ここに、恋人にも自分の言葉を正しい意図で汲んでももらえないオフィーリアの悲哀が見えるのである。また狂気を装ったハムレットは3幕1場で、オフィーリアに対して直接的に暴言を吐くことで彼女を虐げている。具体的には、“Get thee to a nunnery”(3.1.121)「尼寺へ行け」という冷酷な言葉を浴びせたり、“I loved you not”(3.1.119)「君を愛してはいなかった」というオフィーリアが信じて疑わなかったハムレットの彼女への愛情を否定するような発言をしたりしているのである。ちなみに河合が述べるように、“Get thee to a nunnery”(3.1.121)「尼寺へ行け」という言葉は、情欲に溺れたガートルードと同じ罪をハムレット自身とオフィーリアが犯すことを防ぐために放った「ハムレットなりの愛の言葉」としても解釈できるが、やはり「何も知らないオフィーリアにしてみれば、それはひどい仕打ちでしかない」(177)のである。さらにハムレットは次に引用するオフィーリアへの発言で女性性に対する非難もしている。

I have heard of your paintings too, well
enough; God hath given you one face, and you make
yourselves another. You jig and amble, and you lisp, and
nickname God's creatures, and make your wantonness your
ignorance. (3.1.142–46)

君たちの化粧のこともよく聞いている。神は一つの顔をお与えになったが、君たちは別の顔を作ってしまう。気取って歩き、気取って話し、神の創造物にあだ名をつけ、自分たちの不貞にも素知らぬ顔をする。

ハムレットはこのようにして、オフィーリアの女性性という面を通じて彼女を攻撃し抑圧しているが、彼の攻撃の対象である偽善や性的放縦がオフィーリアには当てはまっていないという点に注意したい。これらの性質はあくまでガートルードに当てはまるものであるにもかかわらず、ハムレットはそれらを女性一般の性質として捉えて

おり、その偏った思考でもってオフィーリアを非難しているのである。オフィーリアは恋人にさえ一個人としてではなく女性という型に押し込められて扱われてしまっている。ハムレットのガートルードへの嫌悪という私的感情が原因で、同じ女であるオフィーリアにも偽善や性的放縦といった要素が理不尽に結びつけられ、オフィーリアは本来の自分を抑圧されているのである。そして、これらの残酷な発言を受けたオフィーリアは“O, what a noble mind is here o’erthrown!” (3.1.150) 「ああ、高潔なお心がなんと乱れてしまったことか！」とハムレットの変わりようをひどく嘆いている。愛する人に中傷され嘆き悲しむオフィーリアの悲哀は、観客の憐れみを誘う。さらにハムレットからの抑圧を通じては、観客の憐憫の情を呼び起こすにとどまらず、ハムレットへの若干の反感を生み出すという効果も考えられるという点に触れておきたい。ハムレットの苦悩を理解し心を寄せているはずの観客も、ハムレットのオフィーリアに対する仕打ちの冷酷さや、私情から全女性を偽善的でみだらであると定める短絡的思考を目にすると、酷い仕打ちを受け捨てられ悲しむオフィーリアのほうに同情する。つまり、オフィーリアと観客の心理的距離を縮めることと引き換えに、絶対的主人公であるハムレットと観客とのそれをやや広げる機能もまた、彼女には与えられていると考えられる。

男性たちのオフィーリアに対するさまざまな抑圧がここまでの論述で確認できた。しかし、果たしてオフィーリアは抑圧されるばかりで、自分の意思を示したり「貞節、寡黙、従順」からはみ出したりすることは全くないのだろうか。サミュエル・テイラー・コールリッジ (Samuel Taylor Coleridge) は、1 幕 3 場のレアティーズの長い忠告に対し短い言葉で応えるオフィーリアを、思慮深さや警戒心に欠けた無邪気で無頓着な生娘であると考えた (157)。しかしおそらくそうではないのである。ここからは、抑圧される一方ではないというオフィーリアの側面に注目する。まずオフィーリアは、自分の意見を発言の端々にのぞかせることがある。例えばコールリッジが無邪気さを読み取った、レアティーズがオフィーリアに貞節を守ることを説いた長台詞に対する彼女の受け答えがそれにあたる。オフィーリアは、一旦は“I shall the effect of this good lesson keep/ As watchman to my heart” (1.3.45-46) 「この素晴らしい教えを私の心の番人としておきましょう」と受け入れているが、それに続く次の彼女の台詞にはレアティーズに対する意見の主張が含まれているのである。

But, good my brother,
Do not, as some ungracious pastors do,

Show me the steep and thorny way to heaven,
Whiles, like a puff'd and reckless libertine,
Himself the primrose path of dalliance treads
And recks not his own rede. (1.3.46–51)

しかしお兄さま、どこかの罰当たりの牧師様のように、私には天国へ続く険しい茨の道を示す一方で、ご自分では自惚れて向こう見ずな放蕩者のように、歓楽の桜草の道を歩き、教えを無視するなどということはなさらないでください。

このように兄に対し意志をもって忠告をするオフィーリアの発言を鑑みると、彼女が全くの無意志で、男性権力者の前に完全に沈黙しているわけではないということが理解できる。ほかにもオフィーリアは、3幕1場でハムレットに対しても自分の考えを示している。

HAMLET. That if you be honest and fair, your honesty should admit no discourse to your beauty.

OPHELIA. Could beauty, my lord, have better commerce than with honesty?
(3.1.107–110)

ハムレット：もし君が貞節で美しいなら、君の貞節を君の美しさと会話させてはいけない。

オフィーリア：殿下、美しさこそ貞節と関係があるのではないですか？

このようにハムレットがオフィーリアに述べた意見に対して、オフィーリアは素直に疑問を呈し考えを伝えているのである。つまりオフィーリアにも意志や主張はあるといえる。

さらに物語が進んだ3幕2場では、オフィーリアがハムレットの卑猥な冗談を理解していることがうかがわれる。

OPHELIA. Will 'a tell us what this show meant?

HAMLET. Ay, or any show that you will show him. Be not you ashamed to show, he'll not shame to tell you what it means.

OPHELIA. You are naught, you are naught. I'll mark the play.

(3.2.140–45)

オフィーリア：あの方がこの劇の意味を教えてくださいませんか。

ハムレット：ああ、君がショーをやればその意味も教えてくれるだろうね。もし君が恥ずかしがらずに見せたなら、彼も恥ずかしがらずにその意味を教えてくれるよ。

オフィーリア：いけませんわ。私は劇に注目します。

高橋・河合によると「show=shoe には女性の恥部の意味があった」（235）。つまりそのような言葉を使ったハムレットに対して嫌がる素振りを見せたオフィーリアは、彼の発言の猥褻な意味を読み取っていると考えてよい。男性たちに貞節という美德を押し付けられ、表立ってはそれに従っていたオフィーリアであるが、このやりとりには彼女の性的欲望が表出している。家父長制の下で男性たちに抑圧される一方で、このように抑圧されきらない面を持つオフィーリア像が見えてくるのである。そしてオフィーリアは、4 幕 5 場の狂気の場合でついに抑圧を振り切って舞台の中心に躍り出ることになる。次章では抑圧から解放されたオフィーリアについて論じてゆく。

第3章 狂気の場合の意味とオフィーリアの存在意義

4 幕 5 場で発狂した状態で登場するオフィーリアは、それまで多少自分の考えを表明する台詞はあったものの声を抑圧される状況にあった彼女とは大きく異なる。舞台の中心に現れたオフィーリアは抑圧から自身を解き放ち、これまでよりも明確に意思を主張するのである。その具体例としてまずは、バラッド歌唱に込められたオフィーリアの考えや心情などについて見てゆく。オフィーリアが歌うバラッドは、歌を聞かせる相手と関連がある内容になっており、それによってさまざまな彼女の意思や心の内を表現するのである。例えば次に示す一曲目はガートルードとかかわりがある。

[Sings] How should I your true love know

From another one?

By his cockle hat and staff,

And his sandal shoon. (4.5.23–26)

〔歌う〕本当の恋人をどうやって見分けるの？彼の貝殻の帽子に杖、そしてサンダルで。

高橋・河合はこの一曲目の冒頭部について「『あなたの本当の恋人を別の人と見分けるには』と、本来の夫と『別の人』とを見分けなかった王妃に対して歌ってみせるのは、意味深い」(299)としている。つまりオフィーリアはこの歌を通じて、亡くなった夫の弟と再婚したガートルードを非難している可能性があるのである。そしてレアティーズ登場後の三曲目は、彼に関連する内容となっている。三曲目は“*They bore him barefac’d on the bier; / Hey non nonny, nonny, hey nonny; / And in his grave rain’d many a tear*” (4.5.164-66)「彼は顔を覆われず担架に乘せられ運ばれていった、ヘイ・ノン・ノニー・ノニー・ヘイ・ノニー。そしてお墓には涙の雨が降る」という葬式のバラッドである。喜多野が「担架に乘せられ簡略に埋葬された者への挽歌は、ポローニウスを想起させる」(168)と述べていることから、この歌をレアティーズの前で歌うことで、ハムレットに父を殺された兄妹の悲哀が表現されるといえるのである。このように狂乱のオフィーリアは、彼女から自然と湧き上がっているのであろう考えや思いを示していると思われる。

また二曲目のバラッドは性的な内容であり、卑猥な発言を理解しているように思われるにとどまった3幕2場に比べて露骨にオフィーリアと性が結びついている。

OPHELIA. [*Sings*] To-morrow is Saint Valentine’s day,
 All in the morning betime,
 And I a maid at your window,
 To be your Valentine.
 Then up he rose, and donn’d his clothes,
 And dupp’d the chamber-door;
 Let in the maid, that out a maid
 Never departed more.

KING. Pretty Ophelia.

OPHELIA. Indeed, la, without an oath, I’ll make an end on’t.
 [*Sings*] By Gis and by Saint Charity,
 Alack, and fie for shame?
 Young men will do’t, if they come to’t;
 By Cock, they are to blame.
 Quoth she ‘Before you tumbled me,

You promis'd me to wed'.

He answers:

'So would I 'a done, by younder sun,

An thou hadst not come to my bed' (4.5.46-64)

オフィーリア：[歌う] 明日は聖バレンタインの日、朝早くに乙女の私は窓辺でああなたの恋人になる。そして彼は起きたら服を着てドアを開ける。入るときは乙女、出るときにはもう処女じゃない。

王：かわいいオフィーリア。

オフィーリア：本当にもうおしまいにします。

[歌う] ひどい、あさましい、あんまりだわ。若い男はみんなそう。女が「関係を持つ前に結婚するといったじゃない」と責めると、男はこう答えるの、「そのつもりだったよ、もし君がベッドに来なければ」

まずこのバラッドからは、オフィーリアが間違いなく性的な知識を持ち合わせていることが確認できる。そして男性たちに貞淑であることを要求され、表立ってはそれに従順であり純真な女性として評されることが多いオフィーリアであるが、彼女の性的欲望がここから読み取れるのである。「貞節、寡黙、従順」に収まらないオフィーリアが確実に存在するといえる。それに加えて、このバラッドはそれまでオフィーリアを抑圧してきたハムレットに対する非難が込められている可能性がある。高橋・河合が言うには、“Saint Valentine's day” (4.5.46) 「2月14日」について「この日、男性が最初に出会った女性が真の恋人 (Valentine) になると言われていた」(303)。しかしこのバラッドに登場する女性は、男性の真の恋人になるどころか処女を奪われた挙句捨てられている。ハムレットとオフィーリアの間に肉体関係が存在したか否かは明確に読み取ることができないが、ハムレットに暴言を吐かれた上に愛情さえ否定された、つまり彼の「真の恋人」になることができなかったオフィーリアと、このバラッドの女性には重なるところがある。そのためこのバラッドには、オフィーリアがハムレットへの非難の情を示しているという側面があると読み込むことが可能なのである。

狂乱のオフィーリアが自分の意思をほのめかす例として、次は彼女の花を配るという行為を挙げる。オフィーリアは花言葉を意識し、花を渡す相手によって違う花を配っている。そのそれぞれ違う花言葉を通じてオフィーリアは彼女なりのメッセージを発信しているのである。オフィーリアが花を配る際の台詞の引用は以下のとおりである。

There's fennel for you, and columbines.

There's rue for you; and here's some for me. We may call
it herb of grace a Sundays. O, you must wear your rue with
a difference. There's a daisy. I would give you some
violets, but they wither'd all when my father died. They
say 'a made a good end. (4.5.179-84)

これはあなたへの茴香と苧環。これはあなたへのヘンルーダ、そして私にも少し。
日曜日にはこれを恵みのハーブとも呼びます。ああ、あなたはヘンルーダを違っ
た意味で身につけて。これは雛菊。スマレをあげたかったのだけど、父が死んだ
ときにすべて枯れてしまったわ。素晴らしい最期だったそうよ。

高橋・河合が花言葉と花を渡す相手に次のように言及している。まず“fennel”「茴香」(4.5.179)はおべっかや欺瞞を表し、“columbines”「苧環」(4.5.179)は不義を表す。そしてこれらは王に手渡されるのだらうという(313)。オフィーリアは花言葉を通じて、クローディアスの兄である先王を殺すという不正や、その妻と再婚するという姦通を暗に非難しているのである。これはオフィーリアが、王の統治下にある民衆のなかの一人として、王室に対する抗議をしているとも解釈できる。高橋・河合はまた、“rue”「ヘンルーダ」(4.5.180)は「後悔と悲しみを表す」(313)ものであり、「悲しみのヘンルーダは王妃とオフィーリア自身に配られ」(312-313)とされている。オフィーリアは花を渡す相手に自分とは違った意味でヘンルーダを身につけるよう指示しているため、恋人に突き放され父をも失い狂ったオフィーリアには「悲しみ」のヘンルーダを、亡夫の弟と早急に再婚しハムレットの佯狂の一因を作った「後悔」すべきガートルードにはその意味のヘンルーダを配っていると推測できる。オフィーリアはヘンルーダを通じて狂気に陥るほどの深い悲しみと、王妃への非難を伝えているのである。また“daisy”「雛菊」(4.5.182)は恋の花あるいは欺瞞の花であると高橋・河合が説明している(313)ため、これも亡き夫を裏切り現王と結婚したガートルードに渡されていると考えられる。最後の“violets”「スマレ」(4.5.183)は忠実を意味するが、これにも同様に先王に忠実であり続けることができなかったガートルードへの反発が込められているといえる。つまり花を配るオフィーリアは大人たちに抑圧されるのではなく、むしろ抑圧の範囲外に出て自分自身の意思を舞台の中心で伝えているのである。このようなオフィーリアの姿は、それまでは強く抑圧されてきたからこそ

より強く観客の同情を誘う。観客の心を揺さぶるのはオフィーリアの大きな役割であり存在意義なのである。

オフィーリアが歌うバラッドについてはすでに彼女の意思を表すものとして触れたが、ここからはバラッドが当時の庶民になじみ深いものであったということに着目したい。喜多野は庶民と強い結びつきを持つバラッドをオフィーリアが歌うことで、「オフィーリアの歌唱に庶民階級の女性の声が内面化されている」(159)のだと述べている。また喜多野は、民衆が押し寄せ舞台の外で“Choose we! Laertes shall be king”(4.5.106)「我々が選ぶ、レアティーズを王に」と王室に抗議の声を上げているという状況の中、オフィーリアが再登場しバラッドを歌ったことに着目している。「民衆の中から再登場し、民衆に親しまれているバラッドを歌唱するオフィーリアは、舞台に登場した上での発言が許されない舞台裏の民衆を代表しているといえよう。オフィーリアの歌唱には民衆による王室への抗議が託されていると考えられる」(167)のだという。よって、オフィーリアがバラッドを歌うことで舞台と民衆、つまり観客が一体化してくるといえる。これまでにオフィーリアが観客の憐れみを誘う場面をいくつも取り上げてきたが、このバラッド歌唱により観客の心を動かすだけでなく、その心をつかみ、観客との結びつきをさらに強化するという効果があるということである。そして、シェイクスピアがオフィーリアに狂気の場面を与えなかったとしたら、舞台と観客の強い結びつきが生まれなかったと考えられるため、この機能はオフィーリアに与えられた重要性といえる。

このようにバラッドは観客と舞台を結びつける効果があると考えられるが、貴族女性であるオフィーリアが卑俗な庶民向けの歌を歌うというのは秩序の崩壊を意味するという側面も持つ。狂気の場面の後で、ハムレットの復讐の達成や死、レアティーズやガートルードの死などといった悲劇的結末が訪れることを考慮すると、この秩序の崩壊が悲劇的結末を暗示しているようにも思われる。つまり、オフィーリアにはプロット全体の動きを観客に暗示するという役割があるともいえる。観客の憐れみを誘うところから始まり、バラッドで観客とより強く結ばれるというオフィーリアの役割はほかの登場人物が果たしていないものであり、ここに彼女の存在意義が認められるのである。

結論

本論文では『ハムレット』におけるオフィーリアの存在意義や役割を追求し、彼女

の物語を「語る」術について考察してきた。第1章ではまず、これまでオフィーリアが頻繁に自身の物語を持たない存在として位置づけられてきたことに言及した。次にそれに対する反証として、材源のオフィーリアに当たる女性に、シェイクスピアが観客の情動を揺さぶる役割の付与などを通じて肉付けをし、オフィーリアという人物を造形していることを指摘した。第2章では最初に、男性たちの抑圧の対象にされ表面的には従順であるオフィーリアの悲哀が、観客の感情に訴えかける側面を確認した。そのうえで、彼女には女性としての美德にはめ込まれていない「主体」としての面が劇の序盤から散見されており、それが狂気の場面たる4幕5場での抑圧からの解放につながってゆく論じた。第3章では、狂気の場面で観客と結びついて舞台上で声を上げ、それまで以上に自分自身の意思を明確に表現するオフィーリアの姿があることを確認した。そして狂気の場面において極まる、民衆との距離を縮め観客の感情を強く揺さぶるというオフィーリアに与えられた役割に、彼女の存在意義や重要性を見いだした。

このようにオフィーリアは、単なる抑圧や欲望の対象ではないし、絵画や音楽の題材としての対象にすぎない存在でもない。材源に登場するオフィーリアに対応する女性のように、男性の物語を飾り付けるだけの存在にとどまっているわけでもない。ジュリエットやポーシャ、デズデモーナといったヒロインたちと同じく、自分の意思や欲望を持ちそれを表現する力や物語を推進する力がシェイクスピアによって意図的に与えられ、それらを発揮することが可能な主体なのである。したがってオフィーリアの物語は、紛れもなく彼女を主体として語ることができるものとして存在するのである。

引用文献

Showalter, Elaine. "Representing Ophelia: Women, Madness, and the Responsibility of Feminist Criticism." *Shakespeare and the Question of Theory*. Edited by Patricia Parker and Geoffrey Hartman. Routledge, 1985. pp. 77–94.

イレイン・ショーウォルター「オフィーリアを表象する一女、狂気、フェミニズム批評の責務」浜名恵美訳、青山誠子・川地美子編『シェイクスピア批評の現在』、研究社出版、1993年。

河合祥一郎『謎解き「ハムレット」一名作のあかし』、三陸書房、2000年。

喜多野裕子「“Let her come in”ー『ハムレット』におけるオフィーリアのバラッド歌

唱と政治的危機― 『人間・環境学』 第 23 巻、2014 年、159–71 頁。

楠明子『英国ルネサンスの女たち』 東京：みすず書房、1999 年。

サクソ・グラマティクス『デンマーク人の事績』 谷口幸男訳、神奈川：東海大学出版
会、1993 年 [Grammaticus, Saxo. Saxonis *Gesta Danorum*. Edited by J. Olrik and H.
Ræder. Copenhagen, 1931]。

サミュエル・テイラー・コールリッジ『シェイクスピア批評』 岡村由美子訳、こびあ
ん書房、1991 年 [Coleridge, S. T. *Shakespeare Criticism*. Edited by T. M. Raysor.
London, 1960]。

高橋康也・河合祥一郎編注『ハムレット』、大修館書店、2001 年。

子ども向け絵本の多面的分析

高久 将哉

序論

これまでに、幼稚園児と絵本の関係について、様々な研究がされてきた。例えば、野々上瑞穂、浦上みゆきらの「絵本の読み聞かせと子どもの育ち ―美作大学附属幼稚園の実践を通して―」では、幼稚園教諭がどのように園児に絵本の読み聞かせを行っているかについて調査し、その実態の研究を行っている。幼稚園教諭の園児に関する様々なエピソードが集められており、個別的に研究していた。また、梶谷恵子、脇明子らの「保育者を対象とした絵本選書の研修 ―共通テーマによる絵本三冊の比較―」では、保育者に絵本比較をさせ、絵本を読み聞かせあうことで、保育に活かすための研修を行っていた。大人が大人に絵本を読み聞かせるということが、自身の読み聞かせ能力の向上につながることを、多くの研修参加者が感じたようである。他にも、片桐正敏、長谷川茉奈らの「絵本の読みあい遊びが子どもの言動に及ぼす効果について ―市内 A 幼稚園における予備的検討―」では、子どもの絵本に対する向き合い方の変化について研究している。その過程で、絵本を読んだ後に絵本の内容に関係する遊びをし、園児の発話量やその内容についても考察している。

このように幼稚園児と絵本の関係について幅広い研究がされているが、幼稚園児向けの絵本を多面的に分析し、幼稚園児が普段絵本からどのような言葉をインプットし、言語が発達しているのかについての研究は多くないように思われる。そこで、年少、年長それぞれに向け描かれた絵本を個別に分析し、幼稚園児の言語発達の過程をインプットの観点から調査していく。方法としては、幼稚園教諭へのインタビューを通してどのようにして絵本を読んでいるのか、その考えを明らかにする。その後、幼稚園でよく読まれている絵本を選定して、先行研究を参考に異なり語数や文の複雑さなどを調べ、どの時期にどれ程の語彙や文章に触れているのか、比較、検討をしていく。以上のことから幼稚園児の言語がどのようにして発達していくのかを研究していく。

本研究の流れとしては、まず絵本の読み聞かせの効果を記しつつ本研究の目的を述べ、幼稚園での絵本の位置付けを「幼稚園教育要領」を参考に記し、幼稚園教諭へのインタビューをまとめる。これらを踏まえたうえで、分析した絵本の概要を述べ、絵本を、MLU を参考にした分析、異なり語数、感情語、文の複雑さ、以上の観点から

研究していく。なお、インタビューをした教諭の幼稚園には、私自身2日間にわたり保育参加をしており、そこで経験したこと、考察したことも適宜論じていく。

第1章 本研究の目的

この章では、なぜ幼稚園児の絵本の言語分析を行うのか、という本研究の目的を述べる。それにあたって、雨越康子の「幼児期における絵本の読み聞かせと認知能力との関連 ―ワーキングメモリと語彙力に関する検討―」を参考にしていく。この論文には、幼児期の絵本の読み聞かせと一人読みが認知能力に与える影響について述べられており、第1章には絵本の読み聞かせによって、どのような効果があるのかが、多くの研究のレビューをもとに記されている。様々な効果が期待されているが、特に語彙力の形成とコミュニケーションについて深堀する。

まず、語彙力の形成については、以下のようなレビューがある。

Cunningham & Stanovich (1998) の研究では、日常会話やテレビにしか触れない子どもは、絵本や児童書に出てくる非日常語、すなわち本を読むにあたって必要な語彙に触れる機会が少なくなることが示された。

(中略) たとえば、Senechal, Thomas, & Monker (1995) の4・5歳児の研究では、家庭での読み聞かせ頻度が高いほど語彙が多いことが報告されている。

(6)

つまり、絵本の読み聞かせは語彙力の豊富にすることにつながり、日常的に読み聞かせていくことが大切であることが分かる。

次に絵本の読み聞かせの効果について、コミュニケーションの観点から、レビューを見ていく。

親や養育者との間で読み聞かせを繰り返すことは、子どものコミュニケーション能力の基盤を形成する可能性がある。松居 (1986) は、親の読み聞かせは、肉声で、しかも、その子のために愛のこもった言葉で心から心へ語りかけるもので、人と人との関係は深い精神性と豊かな心を築き上げていく力となることを主張している。また、言語能力の観点から見ても、阪本 (1971) は、読み聞かせと読書は日常会話だけでは得られない表現と語彙を多く提供し、コミュ

ニケーション能力を向上させると述べている。(14)

このように、絵本の読み聞かせは他者と心を通わせる過程で、子どものコミュニケーション能力の向上させることに役立つと分かる。

以上のように、絵本の読み聞かせには十分な効果期待でき、子どもの語彙力やコミュニケーション能力の形成に役立つと考える。そして、その媒体となる絵本にはどのような言葉が用いられ、また、どのような構造となっているかを調査することは十分意義のあることだと考える。そのため、幼稚園児の言語力形成に役立っている絵本に使われている言葉、文の構造などを多面的に分析していく。

第2章 幼稚園における絵本の位置付け

この章では、幼稚園で絵本がどのような位置付けにあるのかについて論じていく。それにあたり、文部科学省発行の「幼稚園教育要領」(以下「要領」とする)を参考にする。要領は3章からなる構成となっており、第2章の「ねらい及び内容」には、「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の五つの領域が記されている。絵本については主に、領域「言葉」の中で触れられている。領域「言葉」は、「概要」、「ねらい」、「内容」、「内容の取扱い」から成り、「概要」以外には各所に絵本についての記述がある。以下にそれぞれ引用し考察していく。

まず、領域「言葉」の概要には、「経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う」(16)と記されている。自分の考えを表現することに重きを置いていることが分かる。

続いて、「ねらい」(3)では、「日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、言葉に対する感覚を豊かにし、先生や友達と心を通わせる」

(16)、「内容」(9)では、「絵本や物語などに親しみ、興味をもって聞き、想像する楽しさを味わう」(16)、「内容の取扱い」(3)では、「絵本や物語などで、その内容と自分の経験とを結び付けたり、想像を巡らせたりするなど、楽しみを十分に味わうことによって、次第に豊かなイメージをもち、言葉に対する感覚が養われるようにすること」(17)、「内容の取扱い」(4)では、「幼児が生活の中で、言葉の響きやリズム、新しい言葉や表現に触れ、これらを使う楽しさを味わえるようにすること。その際、絵本や物語に親しんだり、言葉遊びなどをしたりすることを通して、言葉が豊かになる

ようにすること」(17)、とそれぞれ絵本についての記述がされている。

これらの内容から、絵本によって、言葉の感覚を養うことや、その楽しさを知ること、他者と心を通わせることなどが幼稚園での絵本の位置付けであると考えられる。このように絵本には様々な効果が期待されており、幼稚園教育にとって重要な位置付けであると分かる。

保育参加をして、これらの目的が実際になされているかを見てみたが、多くの園児はできていたように思われる。特に、園児たちは自分の考えをしっかりと表現できる場合が多く、それに加え、「教える」ということもできていた。保育で昔の遊びを体験する時間に、こまに紐を巻き付けることがうまくできない園児がいたところ、これができる園児がコツを具体的に伝授していたのである。当然個人差はあったが、要領のねらいは概ね達成できていると考えた。

第3章 幼稚園教諭へのインタビュー

この章には、私が保育参加をした幼稚園の教諭たちが、どのようにして子どもに絵本を読んでいるのかに関するインタビューをまとめた。質問は、「絵本を園児たちに読むときに意識していることは何か」である。加えて、選書や読み聞かせ後のことまで詳しく答えていただいた。年少、年長、各クラスのインタビューによって、園児たちにどのような読み聞かせを行っているのかが浮き彫りとなり、園児たちの言語発達の解明に活かすことができる。

3.1 年少クラスへのインタビュー

年少クラスの先生は、まず選書にあたっては、絵の多い絵本よりも、主人公に関する描写が分かりやすい絵本を選ぶことが多いようである。また、食べ物に関する絵本を選んで、ただ読み聞かせるだけでなく、コミュニケーションをとるためのものとして扱うこともあるようである。そして、視覚と聴覚で絵本の内容が想像しやすくなるように、擬音語が使われているものを選ぶ傾向があることも挙げていた。以上のことを意識して絵本を読み、その上で先生が絵本を読むときには「これから楽しいことがある」と園児に思わせて、聴く姿勢を作ってもらうことが重要であると述べていた。

年少クラスでの絵本の読み聞かせはこのようにして行われており、絵本を通して様々な効果をもたらそうとしていることが伺える。

3.2 年長クラスへのインタビュー

年長クラスの先生は、クラスでその時々で話題に関する絵本を選ぶようである。例えば、虫で園児たちが盛り上がっている場合には虫が出てくる絵本を選ぶとのことである。これは実体験に関連したことを絵本でも体験することによって、その語彙や話をインプットしやすいようにするためであるようだ。また、子どもの成長に差が出始める頃であるため、多くの園児が理解できそうな絵本を選ぶとも話していた。これによって、今回分析する絵本が多くの園児にとって理解できているものであることが分かる。続いて、実際に絵本を読むときには、絵本の登場人物に合わせて声を変えるようにし、園児が物語に集中しやすいように心がけているようである。また、セリフではなく語りの部分は意図的にゆっくり読むようにして、緩急をうまく使うとも話していた。そして、絵本の内容を園児たちがよりイメージできるように、園児や幼稚園の名前、幼稚園で行っていることなどを絵本にアドリブで加えることもあるようだ。最後に絵本を読み終えたときには、園児それぞれの感想に耳を傾け、普段その際には先生自身の意見はそこまで主張しないようにしているが、年長の後半になると、1人の意見として話す場合もあるとのことである。

3.3 各クラスへのインタビューと保育体験について

以上のように、年少と年長の先生それぞれのインタビューを見てきたが、園児の年齢に応じて意識をしていることが変わっていくことが分かった。特に年長の後半では、先生自身が絵本に関する意見をしている点から、子どもの成長度合いによって、絵本の扱い方の幅がでることが分かった。また、その場で機転を利かせてアレンジしていくといった高度な技術が使われていることには驚いた。幼稚園の保育に参加して、実際に年長の子どもたちがどの程度日本語を扱うことができたかについては、人によるというところは多かったが、保育中の遊びや体験に関するこちらの問いかけに対しては、大方解答できたことが多かったことから、年長の言語力の高さがうかがえた。このことから、絵本においても年長の絵本の語彙の豊富さが予想できる。

第4章 絵本の分析

この章では、分析した絵本の紹介をした後に、MLUを参考にした分析、異なり語数、感情語、単文・複文、従属節、それぞれの分析をしていく。それにあたり、参考にした先行研究も適宜記していく。

4.1 分析した絵本 20 冊の紹介

まずは今回分析に使用した絵本の紹介をしていく。幼稚園では実際にどのような絵本がよく読まれているのかを知ること、幼稚園がどのような言葉に触れているかがよりわかるようになるだろう。各分析を行う絵本の内容について、要約や物語構成、その特徴などを記し、選書にあたっては、保育参加をした幼稚園で比較的良好に読まれるものを年少、年長各 10 冊ずつ選んだ。

・年少向けの絵本

はじめに年少向けの絵本の紹介をする。年少向けの絵本は、擬音語が多く用いられる傾向にあり、物語性のあるものの他に、料理を作る過程が描かれたものがよく読まれているようである。また、詩のようにリズムよく言葉が並べられているものもあり、言葉の覚えやすさにも配慮がされていると考えた。

① 『パンくうこう』 古川タク 作

飛行機の機体を模したパンを飛行機に見立て、パンの空港である「パンくうこう」から多くの種類のパンが飛び立っていく。パンの飛行機には機長の他、乗客も乗っており、飛び立つ際にはエンジン音を、擬音語を用いて表している。ただし、登場人物のセリフはなく、飛行機が飛んでいく様子の描写が多くあった。

② 『どうぞ どうぞ』 こさかまさみ 文 山内彩子 絵

登場人物は、言葉を話せるねずみ、くま、うさぎ、きつねでねずみが主人公である。ねずみが育てたたくさんのいちごを他の 3 匹に「どうぞどうぞ」とお裾分けするが、その後いちごは残り 1 つとなってしまう、ねずみはお裾分けをしたことを後悔する。そして、ねずみが一人で最後の 1 つを食べようとした際に、他 3 匹が訪ねてきてそれぞれが作ったいちご入りの料理を皆で食べ、ねずみはうれしい気持ちになる。このように、他者に親切にして一見損をすると思いきや、巡り巡って得をするようになるという話である。年少の絵本の中では物語性がしっかりしている 1 冊であった。

③ 『ケーキ』 小西英子 作

登場人物はなく、ケーキが作られる過程が描かれている。各過程でケーキの様子が大きく書かれており、イメージがしやすいものとなっている。その際、材料をかき混

ぜる時に「しゃかしゃか」、スポンジにクリームを塗る時に「ぺたぺた」といった擬音語が所々に用いられている。

④『カレーライス』 小西英子 作

登場人物はなく、カレーライスが作られる過程が描かれている。その際、野菜を炒める時には「ジュージュー」、具材を煮こむ時には「コトコト」といった擬音語が用いられている。

⑤『らくだ』 にごまりこ 作

らくだの身体的特徴が全体的に説明されており、その後らくだの行動が擬音語を用いて描かれている。その擬音語の中には、らくだならではのものが含まれていた。

⑥『どんぐりずもう』 いしだえつ子 作 飯野和好 絵

どんぐりが相撲をしている様子を、リズムよく言葉を並べて描いている。どんぐりたちが戦う描写に加え、自然風景の描写もある。相撲の戦況がどのようなものであるのか、語り手の実況によって、細かく想像できるように描かれている。

⑦『ゴトガタトラック』 古賀充 作

様々な色をしたトラックに荷物が積まれており、ある場所に運ばれ、建物ができる過程が描かれている。トラックの走行中の音や、荷物を下ろす際の音に様々な擬音が用いられている。

⑧『ねられんねられんかぼちゃのこ』 やぎゅうげんいちろう 作

夜になり、お月様がかぼちゃに寝るように言うが、かぼちゃには様々な虫が乗っているため、なかなか寝ることができない様子である。最終的にはほとんどの虫にどいてもらい、寝ることになる。虫がどいた際に、歩いていく様子に、その虫特有の擬音語が用いられている。

⑨『こぶたのプーちゃん』 本田いづみ 文 さとうあや 絵

子豚のプーちゃんという主人公が散歩に出かけ、全身が汚れてお化けに見えたことをきっかけに、多くの動物を驚かしていくという話である。最後にはプーちゃんのお母さんに正体を見破れられ、身体をきれいに洗ってもらったところで物語は終わる。

汚れ方によって、それに合った擬音語が使い分けられている。

⑩『ちいさなはりねずみ』 八百板洋子 文 ナターリヤ・チャルーシナ 絵

森に住む小さなはりねずみは、家族と森の中を散歩していた。初めての散歩だったため、喜んでいた小さなはりねずみは、途中で家族とはぐれてしまう。1人で冒険することになり、危ない目に合ったり、親切にされたりと、様々なことを経験し、最後は母親はりねずみと一緒に帰る。年少向けの絵本の中では分量が多く、ストーリーもしっかりしていた。また、擬音語は他のものに比べ少ない点も特徴的である。

・年長向けの絵本

次に年長向け絵本の紹介をする。年長向け絵本の特徴は、まず年少向け絵本よりも圧倒的に分量が多くなっているという点である。そして、教訓めいた内容となっており、教育的な側面をもっているものがあつた。また、年少に比べて擬音語の割合が少なくなっていた。

①『やまやまのへっぴりじさま』 小林輝子 再話 梶山俊夫 画

放屁することで山の神様を喜ばせたおじいさんの暮らしが、それによって良くなっていく。しかし、真似をして嘘をついた違うおじいさんは、ひどい仕打ちを受けることとなる。このように、他者を欺こうとするような悪い人には天罰が下るという教育的な話である。絵本の文体は方言や、古文も用いられており、日本語を幅広く学べる1冊となっている。

②『たけのこほり』 浜田桂子 作

子どもたちが筍掘りに行き、採った筍で筍ご飯を作る工程を描いている。筍掘りでは、それ特有の言葉が表現されており、園児の語彙が豊富になるように描かれている。全体的にリズムよく語彙が並べられており、歌って読める仕様になっている。

③『トラとネコ』 プル・トゥリパティ 再話 いばやしまさこ 絵

なぜネコが自分のフンを隠すのかを、トラとネコの昔話を例にとりて説明されている。トラとネコが仲良く暮らしていた頃、ある日トラが木に登りたいと思い、ネコに教えを乞う。そこで、木に登ることができたトラは、木の上でお腹を空かせてしまい、ネコを食べようとする。こうして両者の関係は悪くなり、ネコはトラから逃げ続け、

最終的に人間の住む村に暮らすようになった。元気で鳴き声が可愛いこと、ネズミを捕まえることができることといったネコ特有の長所が評価され、これを機に各家庭で飼われるようになったという。安心して暮らすことができるようになったネコであるが、ネコはトラに見つかることを恐れて、自分のフンを隠し続けている、というところで物語は終わる。トラとネコ両者の感情がきれいに対照的に描かれている。

④『おやどのこてんぐ』 朽木祥 文 ささめや ゆき 絵

ある宿の襖に描かれていた子天狗が、襖から飛び出し、宿の主人のはちみつを食べることから物語が始まる。宿の主人があれこれと策を講じるも子天狗のいたずらが止まらない。一時的にはそのいたずらによって、宿の客足が遠のいてしまったが、最終的には子天狗の嫌いなサバを襖に描き、子天狗が逃げた後に客足が伸びた、というところで物語は終わる。絵本には珍しい縦書きの文章であった。また、「苦労は最後には報われる」ということを伝える仕様になっていた。

⑤『いたすらからす』 さとうわきこ 作・絵

主人公のおばあさんの家にリンゴの木があり、おばあさんは食べごろかどうか他の動物たちと考える。そこでカラスがやってきて、「一口食べて確かめる」と言うが、全部を食べようとして、怒ったおばあさんがカラスを撃退した拍子にリンゴが全て木から落ちてしまう。そのリンゴを皆で拾って、おばあさんは大きなケーキを作って、カラスも含めて皆で食べるところで物語は終わる。一度敵対した者同士が最後は仲良くなるという物語の構成になっている。

⑥『はるちゃんもうすぐいちねんせい』 秋山とも子 作

もうすぐ小学校1年生になるはるちゃんが、入学準備のためにランドセルや文房具を買いにいく様子を描いている。文全体がはるちゃん目線で語られているため、日記のようになっている。

⑦『ねこまたえん』 とみながまい 文 花山かずみ 絵

歌が嫌いで幼稚園に行きたくないと言う主人公のだいちゃんは、飼い猫のミケの通う幼稚園、「ねこまたえん」に行くことになる。そこでは、猫ならではの自由な場所で、だいちゃんはすっかり気に入る。自由な場所で気分が乗ってきたことによって、だいちゃんは自ら歌を歌うようになった。最後には飼い猫のミケがだいちゃんの幼稚園に

も行きたい、と話しているところで物話は終わる。所々に本文とは違うフォントで、リズムよく歌詞が並べられており、歌える仕様になっている。

⑧『カレーライスとまねきねこ』 荻田澄子 文 飯野まき 絵

お腹がすいた主人公のみきちゃんは、お母さんの体調が悪いため、自分で何か作ることを決める。何を作ろうか悩んでいるところに、置物の招き猫が「カレーライスが食べたい」と話す。こうして一緒に作ることでになり、クマ、ウサギ、猿といった他の動物たちにも協力してもらい、見事おいしいカレーライスが完成し、最後にはお母さんと一緒に食べるところで話は終わる。分量は多いが一文が短いため、テンポよく読める仕様になっている。

⑨『ぼくのキャベツくん』 さとうち藍 文 津田櫓冬 絵

花屋でキャベツの種をもらった主人公のしゅう君は、庭にその種を植えて育てる。季節が巡る中でその変化を楽しむ様子が描かれている。

⑩『すいぞくかんのおいしゃさん』 大塚美加 文 齋藤慎 絵

主人公である水族館の医者が、多くの生き物の異常に気づき、治療をしていくという話である。海の生き物の特徴がよくわかるものとなっている。

4.2 MLU を参考にした分析

それでは、これまでに紹介した絵本の分析をしていく。まずは MLU を参考にした分析を行っていく。参考にした先行研究は、宮田 Susanne の「日本語 MLU（平均発話長）のガイドライン —自立語 MLU および形態素 MLU の計算法—」である。この論文は、平均発話長（英訳は Mean Length of Utterance、以下 MLU とする）について、日本語の自立語と形態素、それぞれの MLU の計算方法をまとめたものになっている。これらを参考にし、絵本の 1 文あたりにどれほどの自立語、形態素があり、年少から年長にかけてどれほど増加しているのかを分析していく。方法は、まず絵本全文を通して、1 文あたりにいくつ自立語と形態素があるのかをカウントし、その平均値を算出した。以下の表 1 と表 2 には、分析した結果、1 文あたりにどれほどの自立語と形態素があるのかを示していく。

表 1 クラス別に見た絵本の 1 文あたりの自立語数と平均値

クラス	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	平均
年少	2	3.1	2.3	2.2	2.3	3.4	1.2	2.1	4.4	3.6	2.66
年長	8.8	3.1	6.5	6.4	3.9	3.1	2.7	2.7	4.1	5.3	4.66

表2 クラス別に見た絵本の1文あたりの形態素数と平均値

クラス	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	平均
年少	4	8.1	4.7	4.8	4.3	6.8	3.5	6.3	11	9.3	6.28
年長	22.1	6.3	17.4	16	10	8	7.3	6.9	11.2	15	12.02

※なお、各表にある①、②といった番号は、先述した絵本の番号と一致している。つまり、年少①の値は絵本『パンくうこう』の自立語数、形態素数である。

それではそれぞれの表の平均値、最小値、最大値について触れ、考察をしていく。まずは自立語の変化について述べる。上記の表のとおり、年少絵本の1文あたりの自立語数の平均は2.66個、年長は4.66個となった。つまり、年少から年長にかけて、1文あたりの自立語の数が1.75倍になることが分かる。また、最小値は年少が絵本⑦の1.2個で、年長は絵本⑦、⑧の2.7個であり、最大値は年少が絵本⑨の4.4個、年長は絵本①の8.8個だった。

続いて、同様にして形態素の変化について見ていく。年少絵本の1文あたりの形態素数の平均は6.28個、年長は12.02個であった。つまり、年少から年長にかけて、1文あたりの形態素数は1.91倍になることが分かる。また、最小値は年少が絵本⑦の3.5個で、年長は絵本②の6.3個であり、最大値は年少が絵本⑨の11個で、年長は絵本①の22.1個だった。

以上のように、自立語、形態素ともに2年間で1文の自立語と形態素が倍近く多くなっていることが分かった。ただし、自立語、形態素ともに年少の平均値が年長の平均値を上回る絵本もあったことにも注意したい。

4.3 異なり語数分析

ここでは絵本全体の異なり語数の分析を行う。参考にした先行研究は、茂木成友、澤隆史らの「重度聴覚障害児童における表記上の誤りの発達的变化」である。この論文は、聴覚障害の児童が書いた作文を表記の誤りとその発達的な変化について研究しており、その際に作文を品詞別に分析している。この品詞別の分析の方法を参考に、

異なり語数をカウントした。方法は、クラスごとに絵本に出てくる言葉を助詞、名詞、動詞、助動詞、形容詞、副詞、接続詞、感動詞、接頭詞、連体詞の 10 項目のいずれかに該当する際に区切っていき、その異なり語数をカウントした。表 3 には、年少、年長の絵本各 10 冊の通算の異なり語数を表しており、表 4 には各絵本の異なり語数、平均値を示す。

表 3 クラス別に見た各 10 冊の異なり語数の合計

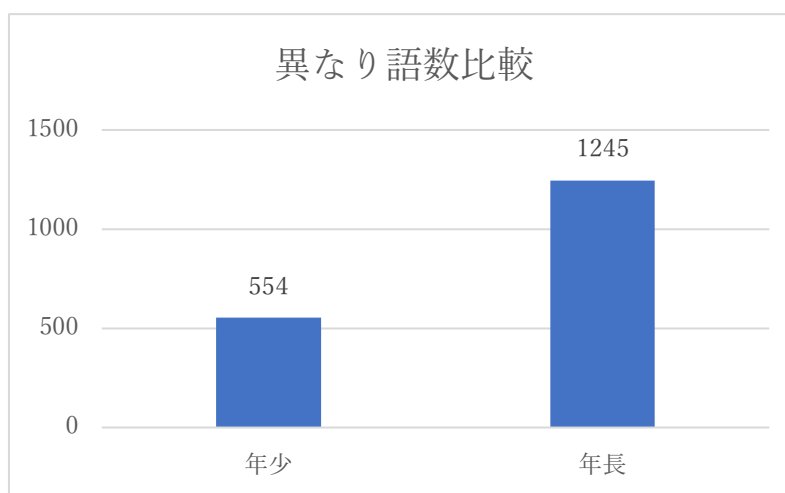


表 4 クラス別に見た絵本ごとの異なり語数と平均値

クラス	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	平均
年少	35	119	63	50	30	136	37	55	98	169	79
年長	196	165	267	273	176	82	178	278	194	259	207

※平均値は小数点以下を四捨五入している。

それでは、まず通算の異なり語数について考察する。表 3 から、年少が 554 語、年長が 1245 語であり、年少から年長にかけて約 2.25 倍増加しており、インプットの量が全く異なるということが分かる。

続いて表 4、絵本ごとに異なり語数を見ていくと、年少の最小平均値が 30 語、年長は 82 語、年少の最大平均値が 169 語、年長は 278 語となった。このように絵本ごとにばらつきがあることが分かった。つまり、絵本によっては、年少向けのものでも、年長向けのものより言葉の数が多いものもあるということである。

4.4 感情語分析

次に絵本に出てきた感情語の分析を行う。参考にした先行研究は、渡邊直美、服部正嗣の「絵本と親子会話、どちらにより多くの感情語が登場するのか」である。この論文では、絵本と親子会話それぞれの感情語の数を計測し、考察がされており、絵本は親の発話よりもより多くの感情語が含まれていて、絵本を読むことの利点があげられていた。また、絵本と親子会話を比較すると、絵本の方がポジティブな感情語が多く、親子会話にはネガティブな感情語が多く含まれていたことが分かっている。これは親子会話にはしつけという目的があるためであると考察されている。

年少と年長でどれほど感情語が豊富になっているのかについては、感情語の延べ語数と異なり語数をカウントして比較していく。また、それぞれどのような感情語が多く絵本に登場したかについては、各感情語の登場回数をカウントした。なお、感情語のカウントについては、中村明の『感情表現辞典』、小野正弘の『日本語オノマトペ辞典』を参考にした。それでは以下の表を用いて論じていく。

表 5 クラス別に見た各 10 冊の感情語の延べ語数・異なり語数の合計

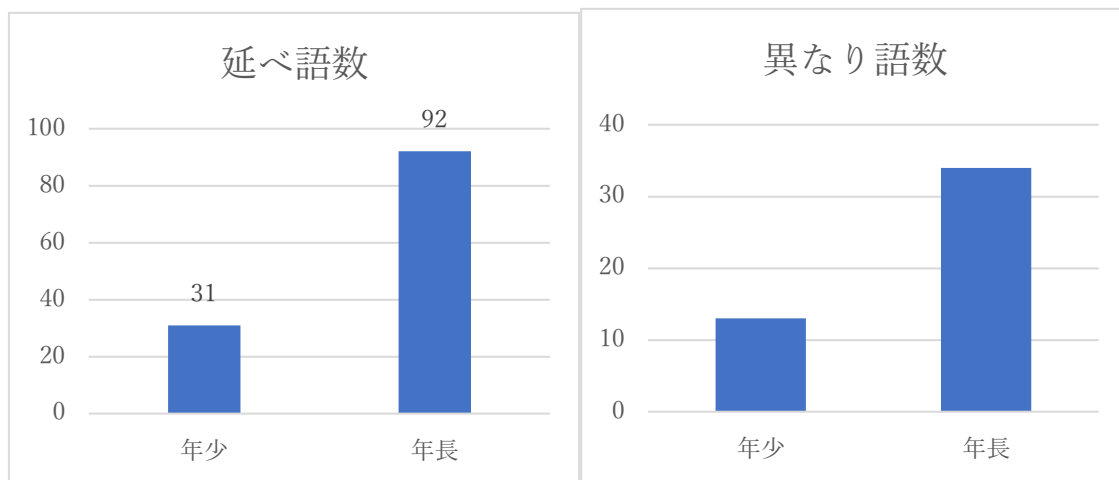


表 6 クラス別に見た感情語の出現頻度 上位 5 語

年少	年長
1. 良い(10)	1. 良い(16)
2. びっくり(4)	2. 好き(6)
3. わー！(3)	2. 喜ぶ(6)
3. 面白い(3)	4. 面白い(4)
3. 笑う(3)	4. びっくり(4)

	4. すごい(4)
	4. 慌てる(4)
	4. 怖い(4)
	4. 楽しい(4)

※()内は出現回数を表し、セルに網掛けがないものはポジティブな単語である。また、濃い網掛けのセルはネガティブな単語で、薄い網掛けは文脈による単語である。

表 5 では感情語の延べ語数、異なり語数の年少から年長への変化を示したが、延べ語数は 31 語から 92 語へと約 3 倍増加した。そして異なり語数は 13 語から 34 語へと約 2.6 倍増加した。4.3 で示した全体の異なり語数よりも、感情語の異なり語数の方が、増加率が高く、感情語が豊かになっているようである。

続いて表 6 の感情語の出現頻度については、「良い」が各クラスともに 1 位であった。これは使い勝手の良さが起因しているように思われる。また、「面白い」がどちらのクラスでも上位語に入っており、絵本の登場人物が笑顔になることが多いことに関係していると考えられる。「びっくり」においても両方にあるが、ポジティブな感情、ネガティブな感情どちらにもよく使われていた。そして、年長になるにつれてネガティブな感情語が上位にランクインしていることが表から分かるが、これは絵本の物語性が豊富になり、登場人物の様々な感情が表現されているからだと推察する。感情の変化については、物語の途中で悲しくなったり、怒ったりした後に笑うようになる、といった変化がよく見られた。

4.5 単文・複文分析

続いて、絵本の単文・複文の分析を行う。参考にした先行研究は、大森梨早子、澤隆史の「聴覚障害児童・生徒の書く文の発達的变化 ―文構造と容認性の観点から―」である。この論文では、聴覚障害児童の書く作文を単文か複文かに分け、各学年でどのように変化していくのかについて論じられており、その上で文法的な誤りについての考察がされていた。分析方法については、生徒が書いた作文を一文ずつ、単文か複文かに分け、さらに複文に従属節が 1 つのみの場合には「複文 1」、2 つ以上含む場合には「複文 2」とし、各文を 3 つに分類していたので、以下にも同様に分類した表 7 を載せる。なお、この論文では複文をさらに 5 つの従属節に分類して分析しており、この手法の分析については次の 4.6 で行うことにする。

表 7 クラス別に見た単文・複文の合計と割合

クラス	単文	複文 1	複文 2	合計
年少	265 (77.25%)	58 (16.90%)	20 (5.83%)	343(100%)
年長	526 (63.99%)	186 (22.62%)	110 (13.38%)	822 (100%)

それでは表 7 について考察していく。まず文の合計が、年少から年長にかけて 343 文から 822 文へ約 2.4 倍増加した。そして、単文、複文 1、複文 2 を見ると、単文の割合が減り、複文の割合が多くなっていることが分かる。それぞれの変化の度合いについては、年少から年長にかけて、単文は約 2 倍に、複文 1 は約 3.2 倍に、複文 2 は 5.5 倍になった。このようにして見ると、複雑な文構造をしている文が圧倒的に増えていることが分かる。特に複文 2 をさらに分析すると、年少では 5.83%と約 17 文で 1 文の割合で従属節が 2 つ以上含まれる文があることに対して、年長では、13.38%と約 7 文で 1 文の割合で従属節が 2 つ以上含まれる文があり、その出現回数が相当増えたと見える。それだけ、2 年間で園児が理解できる文章の幅が増えたということが以上の結果から推察できる。

4.6 従属節分析

最後に、絵本に出てきた複文の従属節分析を行う。参考にした先行研究は、単文・複文分析の際に記した大森梨早子、澤隆史の「聴覚障害児童・生徒の書く文の発達的变化 一文構造と容認性の観点から」である。この研究を参考に表 7 で示した複文 1、複文 2 を名詞節、連体節、連用節、並列節、引用節に分類し、表 8 にまとめた。

表 8 クラス別に見た複文における従属節の使用頻度と割合

クラス	名詞節	連体節	連用節	並列節	引用節	合計
年少	3 (3.03%)	19 (19.19%)	26 (26.26%)	43 (43.43%)	8 (8.08%)	99 (100%)
年長	30 (6.35%)	45 (9.53%)	163 (34.53%)	178 (37.71%)	56 (11.86%)	472 (100%)

それでは表 8 について考察する。まず従属節の合計を見ると、年少から年長にかけて、99 文から 472 文へと約 4.76 倍増加しているおり、1 文が複雑になり、修飾が豊富

にされているようになることが分かる。また、それぞれの従属節を見ると、名詞節、連用節、引用節の割合は増加し、連体節、並列節の割合は減少していることが分かった。そして、これら 5 つの従属節の中で最も単純な文構造となっているのは並列節だが、その割合が約 7% 減少しており、絵本全体で文がより難しくなっていることが分かる。これらのデータが選択した絵本によるのではないかと考えられるが、名詞節、連体節、引用節といった相対的に見て登場回数の少ない従属節は、絵本によってその量にばらつきがあったが、連用節と並列節においては、どの絵本にも多く見られた。加えて、この先行研究においても、学生の作文では連用節、並列節の割合が、どの学年においても高いことが分かっており、これは言語の特徴なのではないかと考えた。

4.7 全体の結果考察

以上 5 つの分析で、子ども向け絵本の語彙変化を多面的に分析したが、年少から年長にかけて最も顕著に変化したのは 4.5 の複文 2 の総数で、年少から年長にかけて 5.5 倍増加していた。続いて、従属節の数が約 4.76 倍、複文 1 が約 3.2 倍、感情語の延べ語数が約 3 倍、感情語の異なり語数が約 2.6 倍、文の合計が約 2.4 倍、全体の異なり語数が約 2.25 倍、単文が約 2 倍、形態素が約 1.91 倍、自立語が約 1.75 倍だった。また、複文の割合が約 17 文に 1 文から、約 7 文に 1 文に変化したことも絵本の複雑さが十分増したことを表していると考えられる。複文の総数、増加の割合から、年少から年長にかけて最も変化が起こっているのは、文の構造であることが分かった。ただし、いずれの分析にしても 2 年間で 2 倍以上数値が伸びたものが多く、幼稚園児の言語発達が目覚ましいものであるということが分かった。

結論

本研究では、子どもの語彙力やコミュニケーション能力の形成に役立つ絵本には、どのような言葉が用いられ、また、それはどのような構造となっているかを調査するために、絵本の言葉や文の構造などを多面的に分析した。そのために、まず幼稚園での絵本の位置付け、幼稚園教諭へのインタビューから、幼稚園では絵本がどのように扱われるべきで、また、実際にどのように読まれているのかを確認した。すると、絵本は大変重要な位置付けであり、また、幼稚園教諭はクラスに応じて絵本の選書、そして扱い方を変えているということが分かった。その上で絵本を分析してみると、園児の絵本による言葉のインプットの量は年少から年長にかけての 2 年間で相当増加し

ていることが明らかになった。確かに保育参加をしてみて、年少と年長では言葉の扱いに相当な差があることと考えたため、納得のいく分析結果となった。

ただし、今回の研究では、1つの幼稚園に絞って調査を行ったが、より多くの園でよく読まれる絵本を調査し、分析した方が結果の偏りがなかったのではないかと考えるため、今後の参考にしたい。また、絵本の選書についても、より多くのジャンルからそれぞれ比較的読むものを選ぶことも検討していきたい。また、この園児の言葉のインプットにおける分析を、アウトプットの分析にも応用することで、より言語発達の過程が分かるようになると思う。

参考文献

- 雨越康子「幼児期における絵本の読み聞かせと認知能力との関連 ―ワーキングメモリと語彙力に関する検討―」京都市立大学大学院博士論文、2021年。
- 小野正弘『日本語オノマトペ辞典』小学館、2007年。
- 梶谷恵子・脇明子・湯澤美紀・片平朋世「保育者を対象とした絵本選書の研修 ―共通テーマによる絵本三冊の比較―」『ノートルダム清心女子大学紀要 人間生活学・児童学・食品栄養学編』Vol.39、No.1、2015年、133-141頁。
- 片桐正敏・長谷川茉奈・福本那奈・石川由美子「絵本の読みあい遊びが子どもの言動に及ぼす効果について ―市内A幼稚園における予備的検討―」『北海道教育大学紀要(教育科学編)』第70巻、第2号、2020年、99-109頁。
- 中村明『感情表現辞典』東京堂出版、1993年。
- 野々上瑞穂・浦上みゆき・大岩玲子・太田和美・山田宏子・中上由紀子・竹田理香・大下幸甫・林朋茄「絵本の読み聞かせと子どもの育ち ―美作大学附属幼稚園の実践を通して―」『美作大学・美作短期大学部紀要』Vol.63、2018年、131-137頁。
- 宮田 Susanne「日本語 MLU（平均発話長）のガイドライン ―自立語 MLU および形態素 MLU の計算法―」『健康医療科学研究』、第2号、2012年、1-17頁。
- 茂木成友・澤隆史・四日市章「重度聴覚障害児童における表記上の誤りの発達的变化」『特殊教育学研究』、50(2)、2012年、161-169頁
- 文部科学省「幼稚園教育要領」2018年。
- 渡邊直美・服部正嗣「絵本と親子会話、どちらにより多くの感情語が登場するのか」、NTT コミュニケーション科学基礎研究所。

年少絵本

いしだえつ子・飯野和好『どんぐりずもう』福音館書店、2014 年。
古賀充『ゴトガタトラック』福音館書店、2018 年
こさかまさみ・山内彩子『どうぞ どうぞ』福音館書店、2019 年
小西英子『カレーライス』福音館書店、2013 年
小西英子『ケーキ』福音館書店、2020 年
にごまりこ『らくだ』福音館書店、2013 年
古川タク『パンくうこう』福音館書店、2019 年
本田いづみ・さとうあや『こぶたのプーちゃん』福音館書店、2014 年
八百板洋子・ナターリヤ・チャルーシナ『ちいさなはりねずみ』福音館書店、2018
年
やぎゅうげんいちろう『ねられんねられんかぼちゃのこ』福音館書店、2018 年

年長絵本

秋山とも子『はるちゃんもうすぐいちねんせい』福音館書店、2016 年
大塚美加・齋藤慎『すいぞくかんのおいしゃさん』福音館書店、2018 年
荻田澄子・飯野まき『カレーライスとまねきねこ』福音館書店、2014 年
朽木祥・ささめやゆき『おやどのこてんぐ』福音館書店、2022 年
小林輝子・梶山俊夫『やまやまのへっぴりじさま』福音館書店、1996 年
さとうわきこ『いたすらからす』福音館書店、2022 年
さとうち藍・津田櫓冬『ぼくのキャベツくん』福音館書店、2003 年
とみながまい・花山かずみ『ねこまたえん』福音館書店、2022 年
浜田桂子『たけのこほり』福音館書店、2004 年
プル・トゥリパティ・いばやしまさこ『トラとネコ』福音館書店、2010 年

1. Introduction

1.1. English

1.1.1. *Characteristics of Participial Relative Clauses*

Sleeman (2017: 3) defines participial relative clauses as relative clauses containing a present participle or a passive/past participle, but no relative pronoun or finite verb. In English, participial relative clauses occur in pre-nominal (1a) and post-nominal (1b) positions.

- (1) a. The broken chair in the hallway is dangerous. [pre-nominal]
b. The girl singing on the stage is my sister. [post-nominal]

Word Count in Participial relative clauses and Position

In this paper, the term “participial phrase” is used instead of participial relative clause because “participial relative clause” is general. The relation between the number of words in a participial phrase and its position may be simplified as type 1 and 2 below. The term “unmodified” refers to a participial phrase made with a present/past participle and noun but no further modifying expression. On the other hand, a “modified” participial phrase consists of a present/past participle, noun, and modifier (e.g., prepositional phrase).

Type 1: unmodified pre-nominal participial phrase

I hate the barking dog.

[-ing N] (-ing: present participle.)

Type 2: modified post-nominal participial phrase

My husband is the man cooking in the kitchen.

[N -ing M(PP)]

Therefore, Type 1 is a participial phrase that occurs in pre-nominal position and contains only a present/past participle and noun. Type 2 is a participial phrase that occurs in post-nominal position and consists of a noun, a present/past participle, and a modifier in addition. However, Types 1 and 2 are not the only types of participial phrases. Types 3 and 4 below are also acceptable in English.

Type 3: modified pre-nominal participial relative clause

Well paid doctors come from famous universities.

[M (Adv)-ed N]

Type 4: unmodified post-nominal participial relative clause

Please don't disturb the baby sleeping.

[N -ing]

Type 3 is a participial phrase that occurs in the pre-nominal position and includes a modifier, a present/past participle, and a noun. Type 4 is a participial phrase that occurs in the post-nominal position and contains only a noun and a present/past participle. Quirk et al. (1985: 1327) state that premodification is somewhat more common when an active participle is modified by an adverb. In other words, it is more natural to make a modified pre-nominal *-ed* participial phrase by adding a certain kind of adverb.

- (2) a. * a described man
b. a carefully described man

(Quirk et al., 1985: 1328)

Quirk et al. (1985: 1327) further point out that an *-ing* participle, unlike an *-ed* participle, resists premodification. In other words, even if an adverb is added before the present (*-ing*) participle, a modified pre-nominal participial phrase with present participle is not allowed in English (3a).

- (3) a. *the carefully-hiding spy (*-ing* participle)
b. the carefully hidden spy (*-ed* participle)

(Quirk et al., 1985: 1327)

However, their explanation is not completely correct. Modified pre-nominal participial phrases with present participle are acceptable when the participle is modified by an adverb (4b) (5b).¹

- (4) a. ? The sound of playing children delighted their parents.
b. The sound of quietly playing children delighted their parents.
(5) a. ? That walking man is my father.
b. That rapidly walking man is my father.

¹ English judgments were checked by Prof. John Matthews, a native speaker of English.

Quirk et al. say that some unmodified *-ed* participles in fixed expressions have postpositions (1985: 1329).

(6) the earliest inventions known

(7) money well spent

(Quirk et al., 1985: 1329)

However, this explanation is not fully right on two points. The first point is that some unmodified *-ed* participles which are not in fixed expression are also able to have a postposition (8) (9).²

(8) The refrigerator is full of a homemade dish spoiled.

(9) The man injured couldn't escape from the accident scene.

The second point is that *-ing* participles also appear in postposition (10) (11).²

(10) I was woken up by a bell ringing this morning.

(11) Tim showed Tiffany a robot dancing.

1.2. Japanese

1.2.1. Characteristics of Participial Phrases

When English participles are translated into Japanese, the *-teiru* form and the *-ta* form are used. The *-teiru* form corresponds to the present participle (*-ing*), and the *-ta* form corresponds to the past participle (*-ed*). Eleven textbooks (Ota et al., 2020; Negishi et al., 2021; Niisato et al., 2016; Sasajima et al., 2020; Nomura et al., 2016a, 2016b; Minton et al., 2021; Minamide et al., 2016; Mimura et al., 2016; Nakamura et al., 2016; Masui, 2020; Hase et al., 2019) are used to confirm how participial phrases are translated into Japanese and how it is taught in English education. Actually, all eleven textbooks used for textbook research translated *-ing* into *-teiru*, *-ed* into *-ta* (12) (13).³

(12)	[English]	the girl talking to Sally
	[Japanese]	Sarii-to hanashiteiru syoujo
		Sally-with talking girl

²English judgments were checked by Prof. John Matthews, a native speaker of English.

³ Japanese affixes include: -top = topic, nom = nominative, acc = accusative, gen = genitive, case,

[N PP prs-par] N (prs-par: present participle)
(Nomura, et al., 2016a: 70-71)

- (13) [English] a son named Chris
[Japanese] Kurisu to nadzuckerareta musuko
Chris as named son
[N PP pst-par] N (pst-par: past participle)
(Nomura, et al., 2016a: 70-71)

1.2.2. Word Count in Participial Relative Clauses and Position

Japanese participles (*-teiru/-ta*) are always pre-nominal. This fact means that Japanese has only Types 1 (unmodified pre-nominal participial phrases) and 3 (modified pre-nominal participial phrases) from section 1.1.2 above. It is possible to use them in a post-nominal position, but that sounds like poetry. There is no limit on the word count in participial phrases in Japanese (14). *-teiru/-ta* forms might be thought of as markers of relative clauses. However, that is not related to this study, so that topic is not discussed here.

Type 1: unmodified pre-nominal participial relative clause

wareta koppu-wa abunai. [Japanese]
a broken cup-top dangerous.
[-ed N]

Type 3: modified pre-nominal participial relative clause

Suteeji-de odotteiru josei-wa watashino haha da.
Stage-loc dancing woman-top my-gen mother is
[[M(PP) -ing] N]

- (14) watashi no ie no chikaku de odotteiru otoko [Japanese]
My-gen house-gen near-loc dancing man
'dancing near my house man' [English]

Like English participles, Japanese participial phrases may appear in either early or late positions within a sentence. As in (15), Japanese participial phrases can appear in subject position, typically an early position in the sentence. Japanese participial phrases are allowed in object (late) position in the sentence, too. (16)

- (15) Onngaku wo kiiteiru shoonenn-wa Taro da.

- Music-case listening boy-top Taro is.
 Subject (Participial phrase) Object Verb
- (16) Michibata-de hikatteita mono-wa kaketa gurasu datta.
 Roadside-loc shiny stuff-top cracked glass was.
 Subject Object Verb
 ‘Shiny stuff (I found) on the roadside was cracked glass.’

2. Transfer in Acquisition

Table 1

	English	Japanese
possible position of participle phrases	pre-nominal / post-nominal	pre-nominal (post-nominal is allowed, but not common.)
general rule about word count of participial relative clause and position	a single word→pre-nominal 2 or more words→post-nominal	Regardless of the number of words, always pre-nominal
exception of general rule	In contrast to the basic rule, some single word participle comes post-nominal position, and some participle phrase with multiple words comes pre-nominal position.	Phrases/words which modify nouns always come pre-nominal position. Post-nominal modification is not completely unacceptable. Post-nominal modification is sometimes used in poetry.

Table 1 summarizes the differences between English and Japanese participial phrases. According to Table 1, the possible position of participial phrases in English and Japanese is different. English allows the post-nominal position, but Japanese does not. Therefore, it is capable to predict that English learners of Japanese will accept only pre-nominal participial relative clauses regardless of word count in participial relative clauses.

3. Predicted Difficulties

I expect that the learning experience through English education in school will influence the grammatical judgments made by Japanese learners of English a lot and may cause various difficulties. This section describes the predicted difficulties for learners caused by their experience with English education.

3.1. Textbook Analysis

In Japan, English education begins in elementary school, and English is a compulsory subject in junior high school and high school. Participial phrases appear twice in the English education curriculum (junior high school and high school). I carried out a textbook analysis to understand how participial phrases are taught in English education. I examined four textbooks for junior high school students and seven textbooks for high school students.

In junior high school English education, participial phrases are in the “post-modification” section. Three of the four textbooks for junior high school include the equivalent of “When the number of present/past participles modifying nouns is a single word, it comes BEFORE nouns” [translated by the author]. In addition, there were no descriptions in which participial phrases made by two or more words come AFTER nouns, but all example sentences follow the two rules below. Therefore, textbook descriptions are simplified as below.

1. unmodified participial phrases come BEFORE nouns.

(e.g. Look at that burning house!)

2. modified participial phrases come AFTER nouns.

(e.g. I want to buy a sofa made by a craftsperson.)

In addition, none of the textbooks for junior high school has a description that “some single word present/past participles come AFTER nouns.” or “Some present/past participles with two or more word come BEFORE nouns.”

In high school curricula English education is separated into two subjects: a) English communication and b) logic • expression. According to the Japanese government curriculum guideline (Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology: 18), *English communication* is a subject to develop skills for communication comprehensively. *Logic • expression* is a subject to improve students' ability to communicate through speaking and writing English, while utilizing their knowledge of logical organization and expression. I examined seven textbooks for *logic • expression* because grammar is taught in those classes. Three of the seven textbooks state “a single word participle comes BEFORE a noun; participles with two or more words come

AFTER a noun”. Another three textbooks do not have descriptions about the number of words in a participial phrase. Just example sentences are included.

3.2. Difficulties predicted on textbook research

The first easily predicted difficulty for Japanese learners of English might be post-nominal modification itself, as the pre-nominal modification is used in Japanese, whereas both pre-nominal and post-nominal modification are used in English. Japanese does not usually allow post-nominal modification, so this construction itself might be difficult for the learners. However, students see a lot of examples of post-nominal modification in class, textbooks, exams, and so on. Therefore, post-nominal modification is not likely to be difficult to acquire because of so many opportunities to see it.

Then, what are the predicted difficulties for Japanese learners of English? I consider two predicted difficulties based on the textbook analysis. The first difficulty is the “unmodified post-nominal participial phrase”. This is because unmodified post-nominal participial phrases are not taught explicitly in English education in Japan. I predict that students infer a rule that when present/past participle is a single word alone, it comes before a noun, in accordance with the textbook descriptions. Unmodified post-nominal participial phrases are the opposite of this rule, so I expect they will be difficult to acquire for Japanese learners of English (JLEs).

The second difficulty I predict is modified pre-nominal participial phrases. The reasoning is the same as the first difficulty: English education in Japan. As mentioned in §3.1, textbook descriptions follow this rule: “modified participial phrases come AFTER nouns.” If students learn this rule from their English education, modified pre-nominal participial phrases should be prohibited for them. Therefore, I expect that JLEs in my study will reject modified pre-nominal participial phrases.

4. Experiment

4.1. Participants

A total of sixty-one JLEs participated in this study (average age = 20.6 years). All of them report Japanese as their native language, and they use Japanese at home. Fifty-eight of the sixty-one (95%) are university students. Eight of them answered “I have stayed in an English-speaking country for over a month.” on a language background questionnaire. Answers from eight JLE participants were excluded according to two standards. The first one is the difference between acceptability of acceptable test sentences and unacceptable fillers. If participants’ acceptability ratings for unacceptable fillers are higher than for

acceptable ones, their responses are excluded from analysis because their English skills are thought problematic. The second one is the range of numbers chosen by the participants. Participants were asked to choose acceptability from one (unacceptable) to five (acceptable). If participants choose only 1 and 2 or only 4 and 5 throughout the entire set, their answers are excluded from analysis because they accept everything, or they do not accept anything.

A control group of English native speakers (NS) included ten participants from a range of English-speaking countries. The average age is 25.3 years. All of them report English as their native language, and they use English at home.

4.2. Grammaticality Judgment Task and Test Sentences

4.2.1. Grammaticality Judgment Task

The experiment was conducted online (Google Forms). Participants were not told the purpose of the experiment, and they were asked to judge sentences on a scale from 1 (completely unacceptable) to 5 (completely acceptable). After they finished all test sentences, the background questionnaire was presented. There were seven items for native English speakers, and nine items for JLEs. The contents of the background research were as follows:

- | | |
|---|-----------|
| 1. Native language | 【NS/JLEs】 |
| 2. Age | 【NS/JLEs】 |
| 3. Occupation | 【NS/JLEs】 |
| 4. Major (for participants who are/were university students.) | 【NS/JLEs】 |
| 5. Country where you born | 【NS/JLEs】 |
| 6. Country where you live now | 【NS/JLEs】 |
| 7. Language you use at home | 【NS/JLEs】 |
| 8. Spent one month or more in an English-speaking country | 【JLEs】 |
| 9. Judgment of description for participial relative clauses | 【JLEs】 |

The details of items number eight and nine above are explained in the next paragraph. Likely, the grammatical judgment of JLEs who have stayed in an English-speaking country is influenced by their experience, therefore the experience of staying in an English speaking country is asked in the survey. However, the duration of experience abroad is limited to over a month because the experience of staying for under one month is not thought to be long enough to influence JLEs English knowledge. JLE participants who have experience staying in an English-speaking country were asked for the following

information.

1. The length of stay
2. The place where you stayed/stay at
3. The age you went to the English-speaking country
4. The purpose of stay

As we saw in chapter three, participial phrases are generally taught in the same way: If a participial relative clause is made with a single word, it comes BEFORE the noun, and if it is made with two or more words, it comes AFTER the noun. That form of instruction might affect JLEs' judgment and knowledge of English grammar, so the three questions below regarding such textbook descriptions were asked. These questions are asked in Japanese.

Is this description correct?

- Some participle phrases made with two or more words come before the noun.
(e.g., *suddenly vanished* treasure)
- Some participles are made with a single word coming after the noun.
(e.g., doll *dancing*)

Have you ever seen the descriptions below?

- When a participle phrase contains a single word, it comes before the noun; when a participle phrase is made up of two or more words, it comes after the noun.

4.2.2. Test Sentences

Twenty-four test sentences are used in the study, and all of them contain participial phrases. Test sentences in this study are created based on four factors. The first factor is pre-modification/post-modification. Pre-modification refers to participial relative clauses whose orders are participial phrase–noun. Post-modification refers to participial phrases whose orders contain noun-participial phrase. The second factor is the modifier word count because JLEs may judge sentences differently based on the number of words in accordance with the textbook analysis above. Test sentences that have participial phrases with a single word/ two words/ three words are included. The third factor is participle tense: present/past participle, and the fourth factor is the position of the participial relative clause. According to Hisaizumi (1986: 92-93), it is easy to infer that a post-nominal present participle without an auxiliary will likely be the end of the sentence or phrase. Hisaizumi (1986: 92-93) states that the positions of participial phrases within the sentence may

influence their acceptability, so the position is set as a factor with “early in the sentence” and “late in the sentence” as levels. Table 2 below presents the numbers of sentences.

Twenty-four unacceptable sentences with participial relative clauses are produced according to the same four factors above. However, they contained semantic anomalies within participial phrases.

(17) *Burning water is so hot that it can hurt you.

(18) *I have a piano played in the 2050s.

In addition to test sentences, twenty-four filler sentences were also used. Within twenty-four filler sentences, twelve acceptable sentences and twelve unacceptable sentences were prepared. The present progressive is used in twelve filler sentences because the *-ing* form used in the present progressive matches the form of the present participle. Past perfective is used in the other twelve filler sentences because the perfective (*-ed*) form matches the form of the past participle. Filler sentences contained various errors including progressive form for stative verbs, subject-verb agreement violations, semantic anomalies, and mismatched tense.

- progressive form for stative verbs

(19) *Tom is loving Mary like a sister.

- subject-verb agreement violations

(20) *Your speaking skill of Italian are getting better.

- semantic anomalies

(21) *Snakes had clapped when I saw them.

- mismatched tense

(22) *While my mother was in the museum, she had cooked at home.

Thus, a total of seventy-two sentences, including thirty-six acceptable and thirty-six unacceptable sentences, were presented to participants.

Table 2 Sentence types and counts

modification	number of words	A	A	A	A	UA	UA	UA	UA	A (acceptable) UA (unacceptable)
--------------	-----------------	---	---	---	---	----	----	----	----	-------------------------------------

	in participi al phrase	PR S	PR S	PS T	PS T	PR S	PR S	PS T	PS T	PRS (present) PST (past)
		E	L	E	L	E	L	E	L	position of participial phrase in sentence E(arly)/ L(ate)
pre-nominal	1	1	1	1	1	1	1	1	1	8
	2	1	1	1	1	1	1	1	1	8
	3	1	1	1	1	1	1	1	1	8
post-nominal	1	1	1	1	1	1	1	1	1	8
	2	1	1	1	1	1	1	1	1	8
	3	1	1	1	1	1	1	1	1	8
sentence count		6	6	6	6	6	6	6	6	48

The total number of sentences including a participial relative clause

$$2 \times 2 \times 2 \times 2 \times 3 = 48$$

(A/UA) (Prs/Pst) (E/L) (Pre/Post) (WordCount 1/2/3)

Results

In this chapter, the result of acceptable test sentences is analyzed because unacceptable test sentences are unacceptable because of various reasons. Therefore, average score of participants is expected to be close to 5 (completely acceptable).

5.1. Difference between Native English Speakers and JLEs

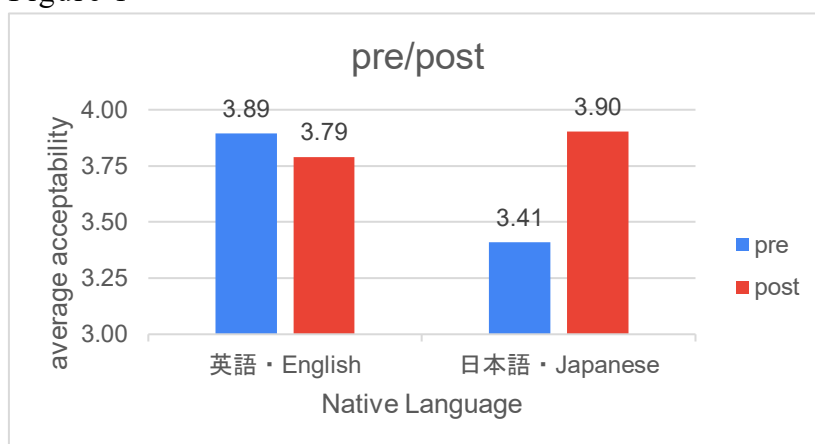
5.1.1. Pre/Post nominal Modification

Among twenty-four acceptable test sentences, twelve sentences include pre-nominal modification, and other twelve sentences include post-nominal modification. Each modification has a participial phrase consisting of 1, 2 or 3 words. The inference about the relation of pre/post nominal modification and word count of participial relative clauses are explained in the next section.

Figure 1 is the average score of acceptability (1-5) in each condition. The left two bars are the result of NS, and the right two are the result of JLEs. Blue means pre-nominal modification, and red means post-nominal modification.

NS did not show the big difference between pre/post nominal modification. The acceptability average of pre-nominal modification is 0.10 higher than post-nominal modification. On the other hand, the acceptability average of JLEs shows about 0.50 difference. The difference is statistically significant. ($p < 0.001$, See Appendix A) JLEs are likely to prefer post-nominal modification to pre-nominal modification. One reason why JLEs prefer post-modification might be the English education they took. In Japanese English education, JLEs have plenty of opportunities to see post modification. Therefore, it is likely for JLEs that post modification, post-nominal modification in this time, is more familiar than pre-nominal modification, and that fact influenced the result.

Figure 1



5.2. Differences within JLEs

5.2.1. Pre/Post nominal Modification and Word Count of Participial Phrases

In this section, six types of test sentences below are discussed.

Table 3

Type	Modification Type	Word Count	e.g.
A	Pre-nominal	1	approaching train
B	Pre-nominal	2	newly built house

C	Pre-nominal	3	very newly arrived immigrants
D	Post-nominal	1	bell ringing
E	Post-nominal	2	people waiting outside
F	Post-nominal	3	piano made in 1860

5.2.1.1. Native English Speakers

Figure 2 shows the average acceptability of pre-nominal modification (type A, B and C) by NS. Although the difference between the left two bars is 0.02, pre-nominal participial phrases with a single word (e.g. dancing doll) is preferred the most. Average acceptability of pre-nominal participial phrases with three words is the lowest. The difference between average scores of pre-nominal participial phrases with a single word and three words is 0.57. The result that the acceptability of participial phrases with a single word is the highest, and one with three words is the lowest is what is expected for JLEs because of textbook description. (Textbook description: Participial phrases with a single word come before nouns, and one with multiple words come after nouns.) However, statistically reasonable differences are not observed. (See Appendix B) It might be because number of NS is not enough.

Figure 2

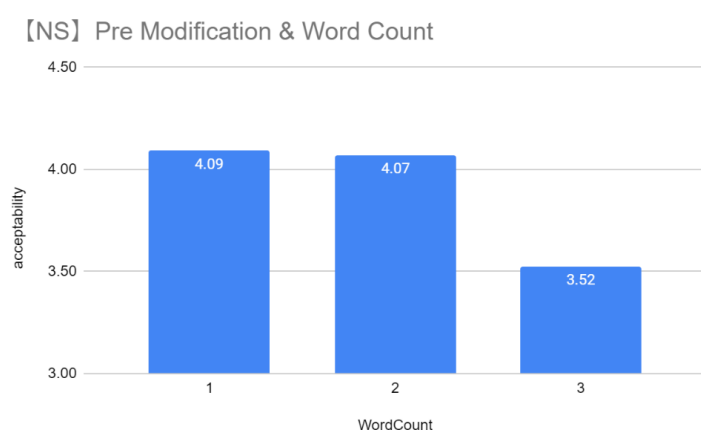
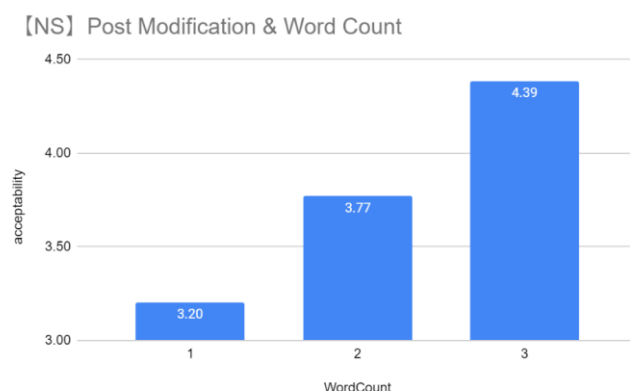


Figure 3 shows the average acceptability of post-nominal modification (type D, E and F) by NS. Statistically difference between post-nominal modification and word count is seen. ($p < 0.001$, Appendix C) What is with highest average acceptability was post-nominal participial phrase with three words. The

second highest is post-nominal participial phrase with two words, then one with a single word. The difference between post-nominal participial phrases with three words and one with a single word is 1.19. This difference is statistically significant. ($p < 0.001$, Appendix D) It is about twice as big as the difference (0.57) between the highest acceptability (4.09) of pre-nominal participial phrases (one with a single word) and the lowest (3.52) (one with three words). It is also clear that the more word count of post-nominal participial phrases increases, the higher acceptability is. This result is also what is expected for JLEs because of textbook description (Participial phrases with multiple words come after nouns.). Therefore, Japanese English textbook description that participial phrases with multiple words come after nouns is likely to be correct.

Figure 3



JLEs

Figure 4 shows the average acceptability of pre-nominal modification (type A, B and C) by JLEs. Although the difference between the left two bars is 0.06, pre-nominal participial phrase with two words is preferred the most. What is the lowest acceptability is pre-nominal participial phrases with three words. This result is different from what is expected from textbook research. Textbook description does not show examples of modified pre-nominal participial phrases, but JLEs accepted pre-nominal participial phrases with two words (=modified pre-nominal participial phrases) in this study. There are some differences between conditions, but statistically significant differences are not observed here.

Figure 4

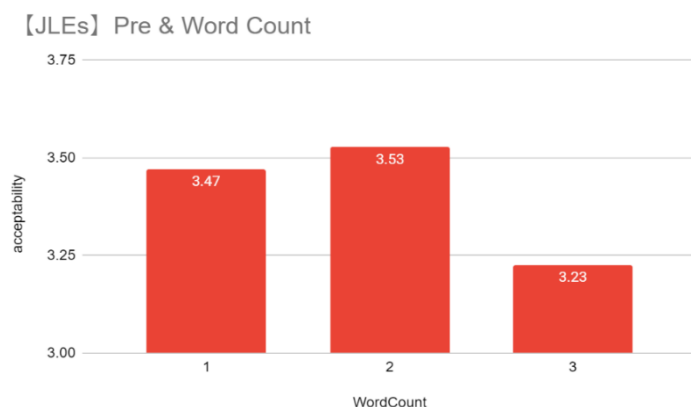
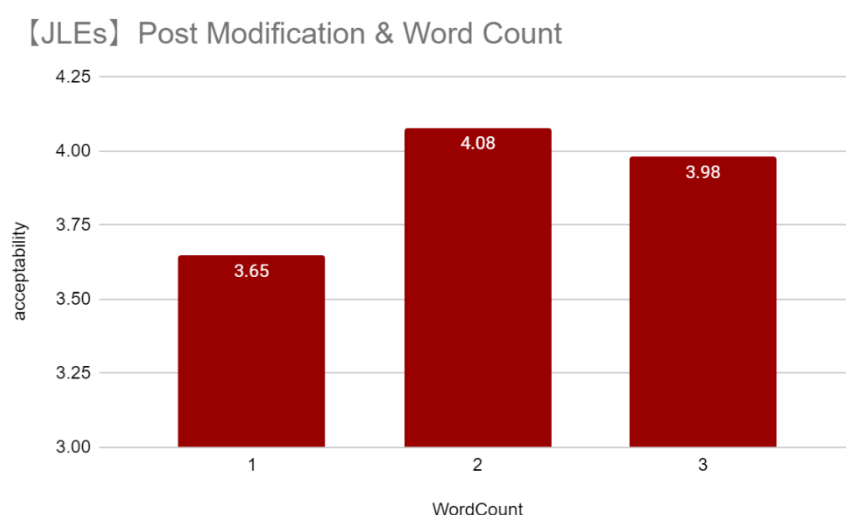


Figure 5 shows the average acceptability of post-nominal modification (type D, E and F) by JLEs. P value between word count of post-nominal participial phrase is close to 0.001. ($p=0.002$, Appendix E) Post-nominal phrases with two words are preferred the most, acceptability of one with a single word got the lowest acceptability. The difference between the highest and lowest acceptability is 0.43 though the difference is not statistically significant. (Appendix F) In terms of the result that acceptability of modified post-nominal participial phrase is higher than that of unmodified post-nominal participial phrase (=post-nominal participial phrase with a single word), JLEs' behavior is like what is expected from the textbook research (Participial phrases with multiple words come after noun.)

Figure 5



5.2.2. Modification Type and Position in the Sentence

Hisaizumi (1986: 92-93) states that the positions of participial relative clauses within the sentence may influence their acceptability, so the position is set as a factor. (§4.2.2) This section's topic is modification position (pre-nominal /

post-nominal) and the position (Early / Late) in the sentence. Four types of test sentences below are discussed here.

Table 4

Type	Position in the sentence	Modification Position	Example
A	Early	Pre	The forward advancing soldiers look exhausted.
B	Early	Post	The person writing reports is one of my colleagues.
C	Late	Pre	I like to kick through a carpet of fallen leaves.
D	Late	post	The farmer threw away a large amount of cabbage spoiled.

Figure 6 shows average acceptability of type A and B above by NS and JLEs. NS's response does not show the big difference. (Appendix G, not statistically significant) On the other hand, JLEs showed statistically significant difference (Appendix H, $p < 0.001$). They prefer post-nominal participial phrase to pre-nominal ones in early position in the sentence. The acceptability difference of JLE's judgement is 0.73 and it is much larger than, that of NS's judgment (0.23).

Figure 6

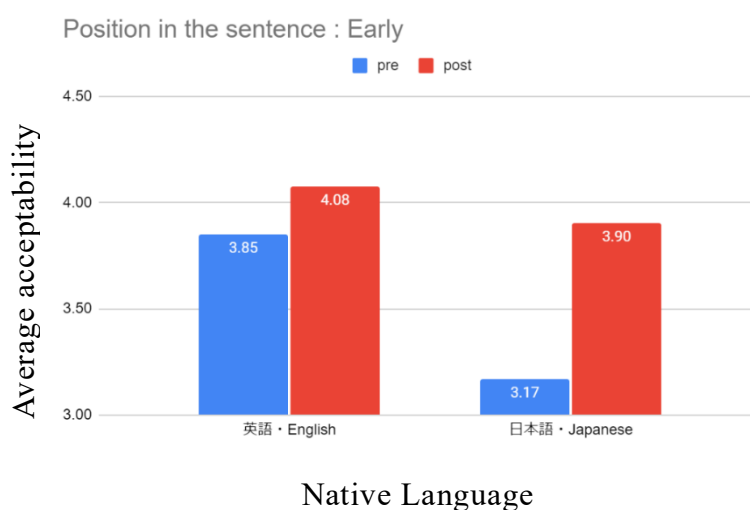
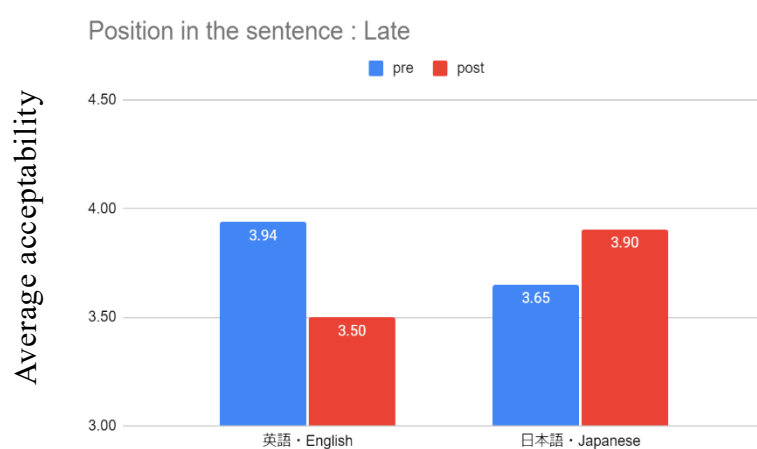


Figure 7 shows average acceptability of type C and D above by NS and JLEs. In late position in the sentence, NS prefers pre-nominal modification to post-

nominal modification although there is no statistically significant difference. (Appendix I, $p=0.083$) On the other hand, JLEs prefers post-nominal modification to pre-nominal modification. (Appendix J, $p=0.017$) JLEs' behavior is opposite to NS's.

In addition to differences within the same native language group, there is a difference between NS and JLEs too. NS show different preference by position in the sentence, but JLEs prefer post-nominal modification both early and late position in the sentence.

Figure 7

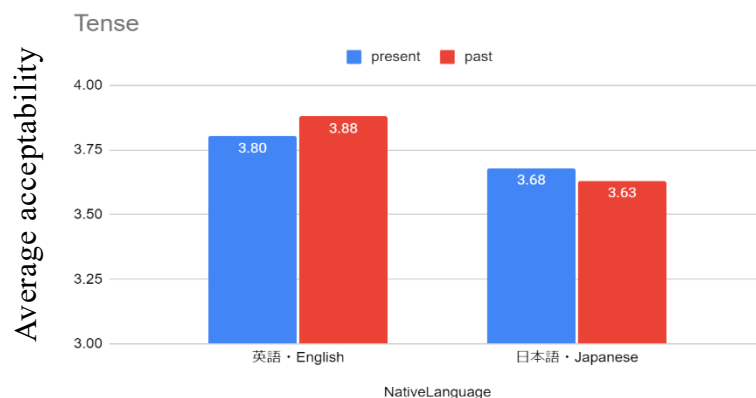


Native Language

5.1.4. Tense

Figure 8 shows average acceptability in the case that test sentences are separated according to tense (present/past) Big differences are not seen in neither of NS and JLEs group.

Figure 8



5.3. Difference within JLEs

In this section, the topic is the relation between answer of two explicit question asked to JLEs and acceptability observed in this study. Two questions are asked in Japanese that is native language of JLEs.

Question 1: Do these descriptions correct?

(1) Participial phrases with multiple (two or more) words sometime comes before noun.

e.g. suddenly vanished treasure
participle noun

Option: correct / wrong

(2) Participial phrases with a single word sometime come after noun.

e.g. doll dancing
noun participle

Option: correct / wrong

Question2: Have you seen / taken explanation such as description below in your English learning experience?

“Participles with a single word come before noun, and ones with two or more words come after noun”

Option: Yes / No

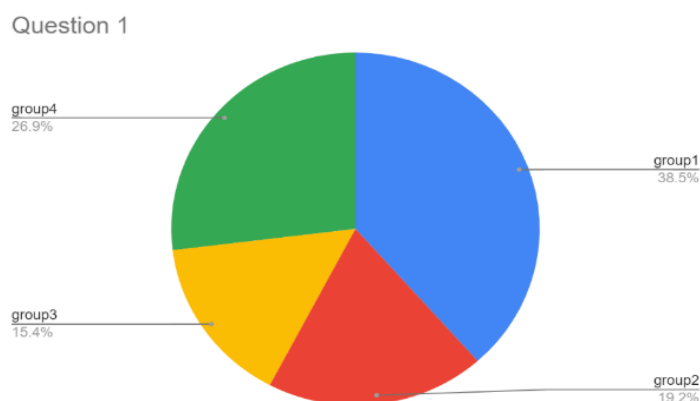
5.3.1. Influence on the Judgment by Rules JLEs believe

In this section, the relation between the first question and acceptability of test sentences is discussed. Figure 9 shows the detail of how JLE participants answered the first question. As in 3.1, fixed way to some extent is used in English textbooks when participle section is taught. Group 1 of four follows those rules. The rule is that participles with a single word come before noun, and ones with two or more words come after noun. In other words, post-nominal participial phrase with a single word and pre-nominal participial phrase with multiple word are not allowed.

38.5% of JLEs is Group1, so It can be said that they believe both rules about word count of pre-nominal and post-nominal participle. JLEs in group 2 and 3 accounting 34.6% in total think either of word count rule of pre-nominal or post-nominal participle is correct, and either of them is wrong. The percentage of group 4, that is opposite to textbook description is 26.9%.

Table 5

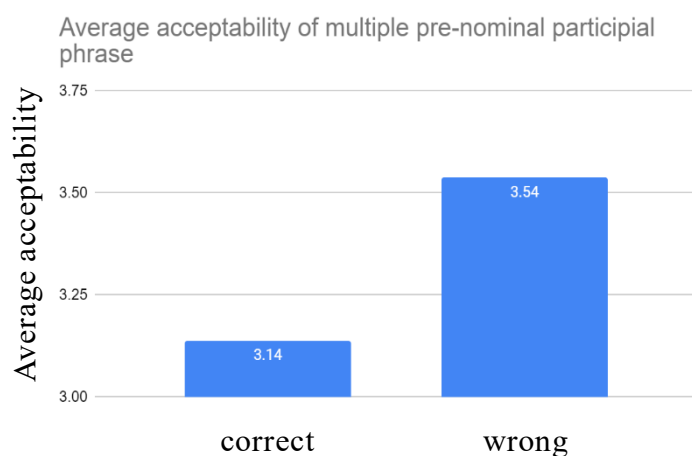
		JLE responses	
	Total	Multiple Pre	Single Post
Group 1	20	wrong	wrong
Group 2	10	wrong	correct
Group 3	8	correct	wrong
Group 4	14	correct	correct

Figure 9

5.3.1.1. Pre-nominal participial phrase with multiple word

Figure 10 shows the average acceptability of JLEs separated by whether JLE think pre-nominal participial phrase with multiple word is correct or wrong. The horizontal axis means judgment of JLEs, and vertical axis means average acceptability. Contrary to the hypothesis that JLEs who judge that pre-nominal participial phrase with multiple words is correct indicate higher acceptability than JLEs who judge wrong, average acceptability of the former is lower than that of latter's although statistically significant is not seen (Appendix K, $p=0.268$).

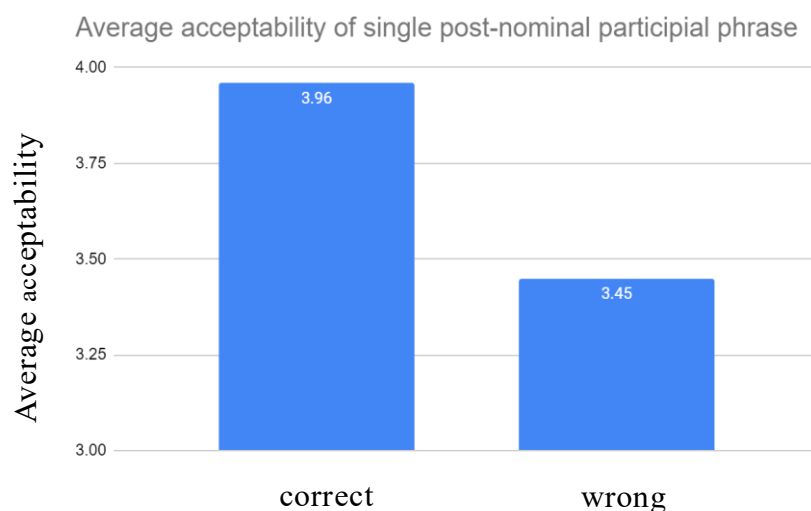
Figure 10



5.3.1.2. *Post-nominal participial phrase with a single word*

Figure 11 shows the average acceptability of JLEs separated by whether JLE think post-nominal participial phrase with a single word is correct or wrong. The horizontal axis means judgment of JLEs, and vertical axis means average acceptability. As expected, that JLEs who judge that post-nominal participial phrase with a single word is correct indicate higher acceptability than JLEs who judge wrong, average acceptability of the former is higher than that of latter's although there is no statistically significant difference between them. (Appendix L, $p=0.091$)

Figure 11



Judgment for post-nominal participial phrase with a single word

Influence on the Judgment by Textbook Description

The topic in this section is question 2 in §5.2. It is hypothesized that JLEs who answered that I have seen the description show higher acceptability of pre-nominal participial phrase with a single word, and lower acceptability of one with multiple words compared to JLEs who answered that I have not seen the description.

Figure 12 shows the relation between answers of question 2 and judgment of acceptable pre-nominal participial phrase used as test sentences. Left two bars show average acceptability of pre-nominal participial phrase with a single word. Pre-nominal participial phrase with a single word matches with textbook rule. (Textbook description: Participles with a single word come before noun) Therefore, it is hypothesized that JLEs who have seen the rule indicates higher acceptability for pre-nominal participial phrase with a single word than JLEs who have not seen the rule. However, JLEs who have not seen the rule showed higher acceptability of pre-nominal participial phrase with a single word compared to JLEs who have seen the rule although there is no statistically significant difference. (Appendix M, $p=0.122$) Right two bars show average acceptability of pre-nominal participial phrase with multiple words. It does not match with textbook rule, so it is hypothesized that JLEs who have seen the rule indicates lower acceptability than JLEs who have not seen the rule. Average acceptability of JLEs who have seen the rule is 0.09 lower than that of JLEs who have not seen the rule. (There is no statistically significant difference, $p=0.54$, Appendix N)

In addition to those results, JLEs who have seen the rule (blue bars) does not show differences between the average acceptability of pre-nominal participial phrase with a single word and multiple word. The difference is 0.01. However, JLEs who have not seen the rule (red bars) showed 0.22 difference between acceptability of participial phrase with a single word and multiple words although there is no statistically significant difference. (Appendix O, $p=0.204$) JLEs who have not seen the rule much prefer pre-nominal participial phrase with a single word to one with multiple words. The result means that JLEs who answered that I have not seen the textbook description performed like textbook description about pre-nominal participle. On the other hand, JLEs who answered that I have seen the rule did not perform like textbook description because they did not show preference. Therefore, it is not likely that knowledge of textbook description influences preference of pre-nominal participial phrase with a single word.

Figure 12

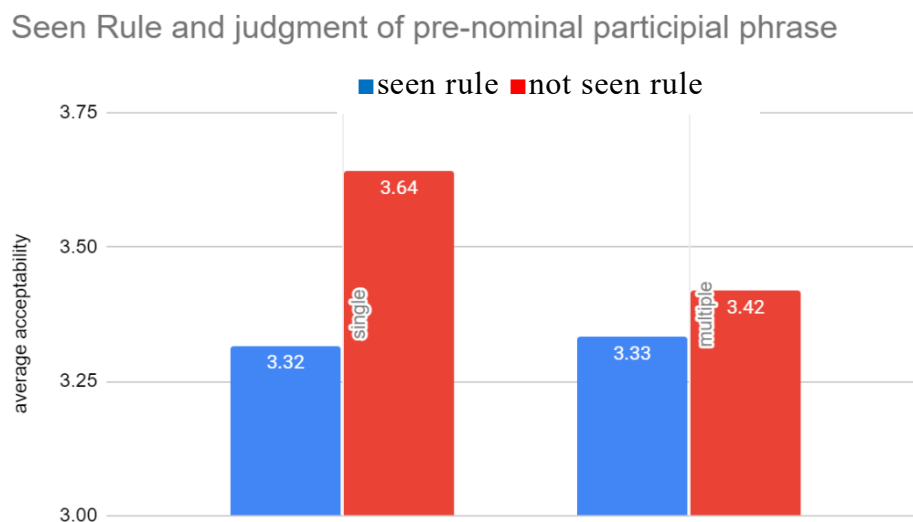


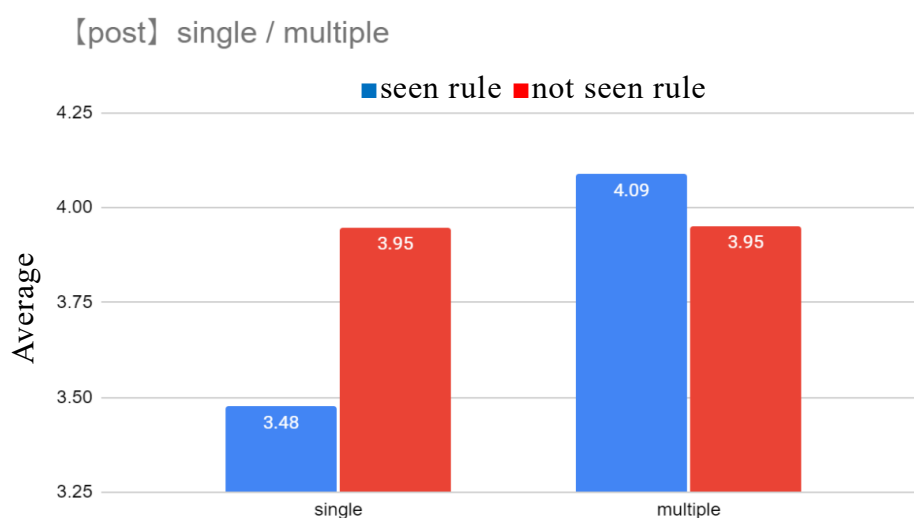
Figure 13 shows the relation between answers of question 2 and judgment of acceptable post-nominal participial phrase used as test sentences. Blue bar is average acceptability of JLEs who answered that I have seen the textbook description. Red means JLEs who answered that I have not seen it.

Left two bars show average acceptability of post-nominal participial phrase with a single word. Post-nominal participial phrase with a single word is opposite to textbook rule. (Textbook description: Participles with two or more words come after noun) Therefore, it is expected that JLEs who answered that I have seen the textbook description show lower acceptability of post-nominal participial phrase with a single word than that of JLEs who answered I have not seen it. As expected, JLEs who answered that I have seen the rule showed lower acceptability than that of JLEs who answered that I have not seen the rule. There is no statistically significant difference between JLEs who answered I have seen/ not seen, but p value was close to statistically significant value. (Appendix P, $p=0.013$)

Right two bars show average acceptability of post-nominal participial phrase with multiple words. (see figure 13) Post-nominal participial phrase with multiple words corresponds to the textbook description: Participles with two or more words come after noun. Therefore, it is hypothesized that JLEs who have seen the textbook description indicate higher acceptability of post-nominal participial phrase with multiple words than that of JLEs who have not seen the description. As hypothesized, JLEs who have seen the textbook description (right blue bar) shows higher acceptability than JLEs who have not seen the textbook description (right red bar). However, there is no statistically significant difference between them. (Appendix Q, $p=0.281$)

In addition to those results, JLEs who answered that I have not seen the textbook description (Red bars) did not show difference between post-nominal participial phrase with a single word and multiple words. On the other hand, JLEs who answered that I have seen the textbook description indicates preference. They prefer post-nominal phrase with multiple words to one with a single word. The preference is statistically significant difference. (Appendix R, $p < 0.001$) Therefore, textbook knowledge influences preference of JLEs judgment of post-nominal participial phrase.

Figure 13

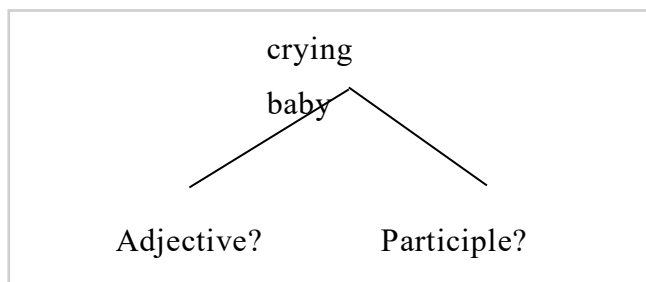


6. Discussion

6.1.1. Preference for participial phrase with two words by JLEs

JLEs prefer participial phrases with two words in both pre-nominal and post-nominal participial phrases as in 5.1.2.2. What is thought of as a reason is that a participial phrase with two words is the easiest construction to process. Participial phrase with a single word is like an adjective in the point of word count, so JLEs may have to judge whether a participial phrase with a single word is an adjectival phrase or participial phrase with a single word.

Figure 14



In addition, noun phrases with *-teiru/-ta* form in Japanese (the grammar construction used to translate English participial phrases into Japanese) is more natural when it consists of two words than when it consists of a single word. In the case that *-teiru/-ta* forms are thought of as what corresponds to English participial phrases, Japanese *-teiru* phrases with two words(2) sound more natural one with a single word(1) for the author of this paper whose native language is Japanese. If native Japanese speakers generally prefer *-teiru* phrases with two words to one with a single word generally, the preference may cause high acceptability of participial phrases with two words.

(22) utatteiru shoujo
 singing girl
 [*-teiru* noun]

(23) jouzuni utatteiru shoujo
 well singing girl
 [[Adj *-teiru*] noun]

Because of the two reasons above, JLEs may prefer participial phrases with two words to one with a single word.

6.2. The difference between two and three words for JLEs

JLEs prefer participial phrases with two words to one with three words. In this section, why JLEs perform like that is considered. The reason that causes the performance in post-nominal participial phrase might be that JLEs have to judge whether a modification phrase with three words is participial phrase or relative clause. (3)(4) The reason why JLEs prefer participial phrases with two words to one with three words might be that pre-nominal phrases with more than a single word are grammatically too “heavy”. The opportunity to see pre-nominal modification with multiple words is not many, but JLEs have plenty of opportunities to see post-nominal modification with multiple words as in

3.1. Therefore, a lack of opportunity of seeing pre-nominal with multiple words might cause lower acceptability of pre-nominal participial phrases with multiple words.

- (25) a. recently arrived immigrant
b. immigrant [who arrived recently]
- (26) a. The very quickly burning house
b. The house [that is very quickly burning].
- (27) a. The person writing reports.
b. The person [who is writing reports]
- (28) a. a piano made in 1860
b. a piano [that is made in 1860]

6.3. Summary

In summary, participial phrases with a single word are likely to be more difficult than those with two words because: (1) JLEs must judge whether the participle in a participial phrase with a single word is an adjective or a participle; and (2) Participles with two words are more natural than those with a single word in Japanese. Participial phrases with three words would be more difficult than with two words because: (1) JLEs must judge whether modifying items of a participial phrase with three words form relative clause or a participial phrase; and (2) the lack of exposure to pre-nominal modification with multiple words. Therefore, participial phrases with two words might be the easiest construction with a participial phrase for JLEs, so they showed high acceptability of participial phrases with two words in both pre-nominal and post-nominal position.

7. Conclusion

This study examined whether native speakers of English perform in a way that matches textbook descriptions used in English education in Japan. Their lower average acceptability ratings for pre-nominal participial phrases correlate with decreased word count of modification, and their higher average acceptability ratings for post-nominal participial phrases correlate with increased word count.

On the other hand, JLEs performed differently. They preferred participial phrases with two words regardless of pre-nominal or post-nominal positions. My proposal to explain that behavior is that: (1) JLEs must judge whether the participle in a participial phrase with a single word is actually an adjective or a participle; and (2) Participial phrases in Japanese are more

natural with two words than with one. In other words, JLEs did not show the performance expected based on the textbook analysis presented in this thesis.

What distinguishes between participial phrases with one and two words or between those with two and three words is left future research. One reason why JLEs prefer participial phrases with two words, may be that participles with two words are more natural than with one word in Japanese, but whether that is common perception among L1 Japanese would need to be verified through future experimental research. If that turns out not to be the reason for the difference between one-word and two-word participial phrases, an approach based on syntactic differences within English or between English and Japanese might be useful.

References

- Hisaizumi, Tsuruo. (1986). “Koishushoku no hojobu wo tomonawanai genzaibunshi no youhou”[“Usage of a post-nominal present participle without an auxiliary”]. Otsuma Review, 19, 85-94
- Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology. (2018). Japanese government curriculum guideline English version(high school). 18
https://www.mext.go.jp/content/1407073_09_1_2.pdf
- Quirk,R & Crystal,D. (1985). A comprehensive grammar of English language. 1263-1265, 1327-1330. Longman Inc.
- Sleeman, Petra. (2017). Participial Relative Clauses. 3. Oxford UP.
https://pure.uva.nl/ws/files/34797650/Participial_relative_clauses_Petra_Sleeman_Oxford_Encyclopedia_revised_version.pdf
- <Textbook Research>
- [Junior High School]
- Ota, H. and other 41 authors. (2020). Here We Go! English Course 3. pp76-79, pp84-85. Mitsumura tosho: Tokyo
- Negishi, M. and other 39 authors. (2021). NEW CROWN. pp.36-39, p.50. Sanseido: Tokyo
- Niisato, M., Sato, Y.,Takanashi, Y., Ushiro, Y. and other 31 authors. (2016). SUNSHINE3. pp.54-59, pp.60-61. Kairyudo: Tokyo
- Kasajima, J., Ano, K., Ogushi, M., Seki, N. and other 126 authors. (2020). NEW HORIZON English Course3. pp.82-83 Tokyo Shoseki: Tokyo
- [High School]
- Nomura, K., Yamasaki, N., Uchida, S., Shimabara, K., Takahashi, M., Caraker, R., Smith, R. and B. Ralph (2016a). VisionQuest Advanced, pp.70-71, p.115, Keirinkan: Osaka.
- Nomura, K., Yamasaki, N., Uchida, S., Shimabara, K., Takahashi, M., Caraker, R., Smith, R. and B. Ralph (2016b). VisionQuest Standard, pp.66-67, p.115, Keirinkan: Osaka.

- Minton, D., Ashida, R., Nishikawa, S., Okano, K. and Horigushi, K. (2021). POLESTAR English Expression I, pp.66-67, Sukenshuppan: Tokyo
- Minamide, K., Schourup, L., Lehner, D., Oguri, Y., Nishikawa, M., Mimura, K., Takada, T., Sugimoto, Y. and Hiroshi, M. (2016). Big Dipper I. pp.48-49, Sukenshuppan: Tokyo
- Nakamura, M., Okamoto, M., Kato, Kitano. M., Sakuda, K and Yamada, M. (2016). NEW FAVORITE English Expression I. pp.60-61, Tokyo Shoseki: Tokyo
- Masui, H.(2020). UNICORN English Expression 1 WORKBOOK [Advanced], Buneido. Tokyo pp.80-81.
- Hase, N., Akamatsu, N., Iijima, R., Sato, R., Date, M., Nishi, I., Bando, Y., Hirao, I., Miyasako, N., Yasugi, S and White, S. (2019). Vivid English Expression I NEW EDITION. pp.116-117, Daiichi Gakushusha: Tokyo

Appendices

Appendix A

【JLEs】 pre/post (modification type)

ANOVA - Response

Cases	Sum of Squares	df	Mean Square	F	P
Pre/Post	79.012	1	79.012	40.324	< .001

Note. Type III Sum of Squares

Appendix B

【NS】 Pre-nominal & Word Count

Post Hoc Test- Word Count

Word Count	Mean Difference	SE	t	p _{tukey}
1 2	0.023	0.298	0.076	0.997
1 3	0.568	0.298	1.909	0.140
2 3	0.545	0.298	1.833	0.163

Note. P-value adjusted for comparing a family of 3

Appendix C

【NS】 Post-nominal & Word Count

ANOVA - Response

Cases	Sum of Squares	df	Mean Square	F	p
Word Count	30.742	2	15.371	8.723	< .001

Appendix D

【NS】 Post-nominal & Word Count 1/2/3

Post Hoc Comparisons – Word Count

Word Count	Mean Difference	SE	t	p _{tukey}
1 2	-0.568	0.283	-2.008	0.114
1 3	-1.182	0.283	-4.176	< .001
2 3	-0.614	0.283	-2.168	0.081

Note. P-value adjusted for comparing a family of 3

Appendix E

【JLEs】 Post-nominal & Word Count

ANOVA - Response

Cases	Sum of Squares	df	Mean Square	F	p
Word Count	22.028	2	11.014	6.304	0.002

Note. Type III Sum of Squares

Appendix F

【JLEs】 Post-nominal & Word Count

Post Hoc Test – Word Count

Word Count	Mean Difference	SE	t	p _{tukey}
1 2	-0.431	0.127	-3.385	0.002
3	-0.333	0.127	-2.621	0.024
2 3	0.097	0.127	0.764	0.725

Note. P-value adjusted for comparing a family of 3

Appendix G

【NS】 Pre/Post in early position of the sentence

ANOVA - Response

Cases	Sum of Squares	df	Mean Square	F	p
PrePost	1.705	1	1.705	0.943	0.333

Note. Type III Sum of Squares

Appendix H

【JLEs】 Pre/Post in early position of the sentence

ANOVA - Response

Cases	Sum of Squares	df	Mean Square	F	p
PrePost	87.414	1	87.414	42.591	< .001

Note. Type III Sum of Squares

Appendix I

【NS】 pre/post in late position of the sentence

ANOVA - Response

Cases	Sum of Squares	df	Mean Square	F	p
PrePost	6.371	1	6.371	3.042	0.083

ANOVA - Response

Cases	Sum of Squares	df	Mean Square	F	p
-------	----------------	----	-------------	---	---

Note. Type III Sum of Squares

Appendix J

【JLEs】 Pre/ Post in late position of the sentence

ANOVA - Response

Cases	Sum of Squares	df	Mean Square	F	p
PrePost	10.377	1	10.377	5.721	0.017

Note. Type III Sum of Squares

Appendix K

【JLEs】

Focused items: Pre-nominal participial phrase with multiple word

Comparison: Judgment for the description (Participial phrases with multiple (two or more) words sometime comes before noun.) correct/ wrong

Post Hoc Comparisons - MultiplePreOK

	Mean Difference	SE	t	p _{tukey}
correct wrong	-0.120	0.108	-1.108	0.268

Appendix L

【JLEs】

Focused Items: Post-nominal participial phrase with a single word

Comparison: Judgment for the description (Participial phrases with multiple (two or more) words sometime comes before noun.) correct/ wrong

Post Hoc Comparisons - SinglePostOK

	Mean Difference	SE	t	p _{tukey}
correct wrong	0.181	0.107	1.692	0.091

Appendix M

【JLEs】

Focused item: Pre-nominal participial phrase with a single word

Comparison: have seen rule or have not seen rule

ANOVA - Response

Cases	Sum of Squares	df	Mean Square	F	p
SeenRule	5.488	1	5.488	2.416	0.122
Residuals	477.130	210	2.272		

Note. Type III Sum of Squares

Appendix N

【JLEs】

Focused item: Pre-nominal participial phrase with multiple words

Comparison: have seen rule or have not seen rule

ANOVA - Response

Cases	Sum of Squares	df	Mean Square	F	p
SeenRule	0.755	1	0.755	0.363	0.547
Residuals	878.111	422	2.081		

Note. Type III Sum of Squares

Appendix O

【JLEs】

Focused Items: JLEs who answered that “I have seen the textbook description rule”.

Comparison: pre-nominal participial phrase with a single word and multiple words

ANOVA - Response

Cases	Sum of Squares	df	Mean Square	F	p
Modification	3.045	1	3.045	1.624	0.204
Residuals	513.940	274	1.876		

Note. Type III Sum of Squares

Appendix P

【JLEs】

Focused Items: Post-nominal participial phrase with a single word

Comparison: have seen rule vs have not seen rule

ANOVA - Response

Cases	Sum of Squares	df	Mean Square	F	p
SeenRule	11.535	1	11.535	6.298	0.013
Residuals	384.653	210	1.832		

Note. Type III Sum of Squares

Appendix Q

【JLEs】

Focused Items: Post-nominal participial phrase with multiple words

Comparison: have seen rule vs have not seen rule

ANOVA - Response

Cases	Sum of Squares	df	Mean Square	F	p
SeenRule	1.938	1	1.938	1.166	0.281
Residuals	701.722	422	1.663		

Note. Type III Sum of Squares

Appendix R

【JLEs】

Focused Items: JLEs who answered that I have seen the textbook description

Comparison: post-nominal participial phrase with a single word vs multiple words

ANOVA - Response

Cases	Sum of Squares	df	Mean Square	F	p
Modification	30.012	1	30.012	16.553	< .001
Residuals	649.088	358	1.813		

Note. Type III Sum of Squares

Appendix S

Sentences used in the survey

A/U=acceptable/ unacceptable

Pre/post=premodification, postmodification

E/L=Early/ Late (position in the sentence)

Word count=the number of word(s) that make(s) participial phrase

	A/U	pre/post	E/L	pre/post	word count	
1	A	prs	E	pre	1	A flying car is what Fred always dreamed of building when he was alive.
2	A	prs	E	pre	2	The forward advancing soldiers look exhausted.
3	A	prs	E	pre	3	The very quickly burning house is almost completely gone.
4	A	prs	E	post	1	A bell ringing woke me up before sunrise.
5	A	prs	E	post	2	The person writing reports is one of my colleagues.
6	A	prs	E	post	3	The police investigating the crime are looking for three men.
7	A	prs	L	pre	1	Tom was frightened by an approaching train .
8	A	prs	L	pre	2	When Bob was walking alone in the dark forest, he heard a loudly screaming woman .
9	A	prs	L	pre	3	I have a pile of groceries in the car and a rather quietly sleeping baby .
10	A	prs	L	post	1	Daisy showed Tiffany her doll dancing .
11	A	prs	L	post	2	I don't know people waiting outside ?
12	A	prs	L	post	3	I have a large room overlooking a garden.
13	A	pst	E	pre	1	The wanted man was last seen in Cambridge, according to the police.
14	A	pst	E	pre	2	A recently bought car was stolen from the owner's driveway.
15	A	pst	E	pre	3	The very newly arrived immigrants are from the Phillipines.
16	A	pst	E	post	1	The woman injured was able to walk down the stairs alone.
17	A	pst	E	post	2	A number selected randomly will decide the winner of the lottery.
18	A	pst	E	post	3	His promotion to manager based on recommendations was unexpected.
19	A	pst	L	pre	1	I like to kick through a carpet of fallen leaves .
20	A	pst	L	pre	2	The rental agency said that a newly built house would be expensive.
21	A	pst	L	pre	3	I heard that Dr. McDonald is a very well paid physician .
22	A	pst	L	post	1	The farmer threw away a large amount of cabbage spoiled .
23	A	pst	L	post	2	My mother needs to replace the computer stolen yesterday .
24	A	pst	L	post	3	Harry owns a piano made in 1860 .
25	U	prs	E	pre	1	Burning water is so hot that it can hurt you.
26	U	prs	E	pre	2	The thirst of noisily sleeping children always makes me nostalgic.

27	U	prs	E	pre	3	The very slowly climbing waterfall is extremely old.
28	U	prs	E	post	1	The boy biting is Tom's cousin.
29	U	prs	E	post	2	The lawyer bullying that sandwich is my uncle.
30	U	prs	E	post	3	The dog reading next door sounds like a terrier.
31	U	prs	L	pre	1	Tom was frightened by a happening train .
32	U	prs	L	pre	2	My brother is that slowly standing man on the track .
33	U	prs	L	pre	3	When Bob was alive, he wanted to build a very low sailing car .
34	U	prs	L	post	1	Tom thought the fish talking was annoying.
35	U	prs	L	post	2	My teacher is a man roaring there .
36	U	prs	L	post	3	I have a large room overseeing the house.
37	U	pst	E	pre	1	I like eating broken yogurt in summer.
38	U	pst	E	pre	2	Our recently born friend , Tom, is a very nice man.
39	U	pst	E	pre	3	The only recently cooked jewels were ones my mother gave me.
40	U	pst	E	post	1	Books discontinued are sold to book agencies early.
41	U	pst	E	post	2	Wool knitted purple comes from Vietnam.
42	U	pst	E	post	3	I like mountains covered with moon.
43	U	pst	L	pre	1	My sister's house is a green wall with a pierced roof .
44	U	pst	L	pre	2	"Indiana Jones Adventure" is a movie about a suddenly writing treasure .
45	U	pst	L	pre	3	The number of weddings with never after married men is declining.
46	U	pst	L	post	1	Luke likes raw carrots, but doesn't like carrots eaten .
47	U	pst	L	post	2	Someone brought my purse burnt yesterday to the police.
48	U	pst	L	post	3	I have a piano played in the 2050s.
49	A	prs	E	na	na	He is playing the piano very noisily.
50	A	prs	E	na	na	Jessy is writing a report right now.
51	A	prs	E	na	na	They are reading a picture book together.
52	A	prs	L	na	na	Medical technology is advancing very rapidly.
53	A	prs	L	na	na	The population of the world is increasing very fast.
54	A	prs	L	na	na	At first I didn't like my job, but I'm starting to enjoy it now.
55	A	pst	E	na	na	We had walked to the station early in the morning.
56	A	pst	E	na	na	It had rained when I got up.
57	A	pst	E	na	na	When I had had dinner, someone knocked on the door.
58	A	pst	L	na	na	When my mother arrived at the station, I had waited for her.
59	A	pst	L	na	na	While I went to my part time job, my friends had prepared for my birthday party.

60	A	pst	L	na	na	This time last year I had lived in Hong Kong.
61	U	prs	E	na	na	I am knowing her since I was five years old.
62	U	prs	E	na	na	Tom is loving Mary like a sister.
63	U	prs	E	na	na	She is seeing him while she sleeps.
64	U	prs	L	na	na	The frequency of earthquakes is sitting .
65	U	prs	L	na	na	Your speaking skill of Italian are getting better.
66	U	prs	L	na	na	I didn't like math in the past, but I'm forgetting to teach it.
67	U	pst	E	na	na	I has watched the movie yesterday morning.
68	U	pst	E	na	na	Harry had eaten before he woke up.
69	U	pst	E	na	na	Snakes had clapped when I saw them.
70	U	pst	L	na	na	While my mother was in the museum, she had cooked at home.
71	U	pst	L	na	na	The population of young people in Japan had increased in the future.
72	U	pst	L	na	na	When Tom saw Tiffany, she have played in the park.